

は敵が掘った散兵壕がある。

（敵ははや退却したのかな）

と思ったときだ。

ダダダダッ……。突然、前面三方の山が火を吐いた。午後四時ごろだった。

「伏せろ」

木田中隊長は絶叫した。

（畜生！はかられた）

見ればいつの間にか支那人は姿を消している。中隊は、手ぐすねひいて待っている敵のどまん中へまんと誘い込まれたのだ。兵士たちは敵が残っていた付近のざん壕に飛び込み、応戦する。だが、敵火力は激しい。勇敢な敵兵は接近して手投げ弾を投げ込んでくる。たちまち二人（山中、内田）が戦死、二人（上野、井村）が負傷、戦闘は夜にはいった。しとしと雨も降りだした。

木田中隊長は川戸（正巳）小隊長、田中（操）准尉とひたいを集めた。



作戦をねる旅団司令部

「このままじゃ全滅だ、どうする」

「斥候をだそう」

「そりゃあ無理だ。登ってきた道は分かるまい」

川戸小隊長も思案顔。

「よし、それではおれの責任で、全員山をおりよう」

と木田中隊長はハラを決めた。時に午後八時。中隊は壕をはいだした。

「道は危いから山の中を降りよう。みんな一列で前の者の銃剣につかまり、落後せぬよう、いいか」  
こうして中隊は動き出した。

小降りだが、相変わらず雨足は途切れない。あたりは真のヤミ。イバラの中を一步一步、手さぐり、足さぐりで移動する。この間にも時々敵弾が追ってくる。ピシッ、と足元の雑木を食いちぎる無気味さ、岩石が崩れる。断崖だ。

「気をつけろ」

しばらく行くと今度は段々になった田んぼ。

「あっ」

足を踏みはずし、数メートル下にもんどりうつ。後続者もつぎつぎ落ちて折り重なった。やっと谷間に出了。こうして夜どおしイバラの中を悪戦苦闘、ついに午前六時ごろ光州街道の能家河付近に脱出した。やれやれ、どの兵も顔やからだは傷だらけ。さっそく人員点呼する。すると市川一等兵がいない。途中

最後の休憩をしたあたりから行方不明になってしまったのだ。

腹ごしらえをして出発、午後四時ごろには沙窩にたどりついた。ただちに第三大隊と連絡、第七中隊は連隊直轄となって宿営した。

「連隊本部では第七中隊が消えてしまったと心配してくれていた。大切な部下を失ったばかりか、徒勞に終わった戦闘でした。部下のめい福を祈っています」

と木田さんは回想している。

木田さんは幹部候補生出身、十二年八月召集を受けたときは少尉に任官したばかりだった。このあと十月十五日の戦闘で右眼に貫通銃創を受けるが、その血の記録は一〇三高地の項で述べよう。

### 単独で決死の連絡

——前田軍曹単独で包囲を突破——

### 沙窩付近の戦闘

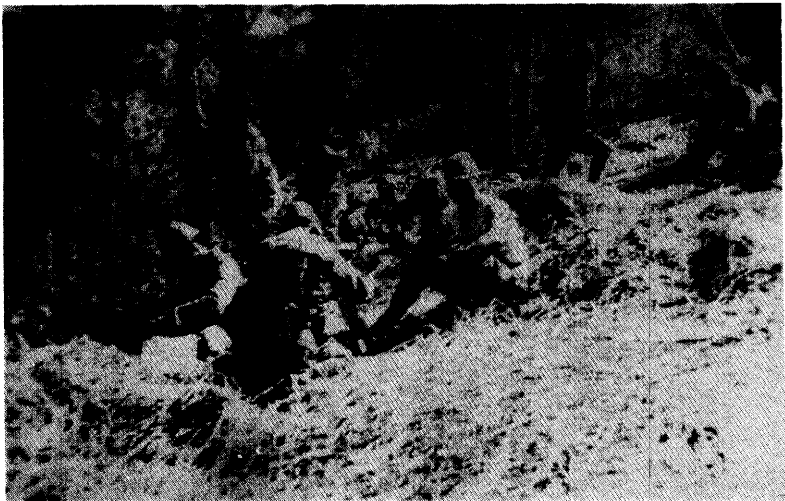
単独で敵包囲網を破り、暗夜師団野砲に救援を連絡した四日市市朝日町、米穀商、前田勝三郎さん（〇〇）の話。前田さんは第八中隊第一小隊第一分隊長（軍曹）だった。磨盤山の攻略が始まろうとするころ、旅団司令部は後方の沙窩付近へ進出していた。同指令部は、沙割から少し離れた山麓（すり鉢底に似た地形）の一軒家に置かれ、わが連隊の第八中隊（清水操中尉、のち戦死）が旅団直轄で警備に当たっていた。九月二十四日、敵はどうやら司令部の位置を見つけたらしく、朝から迫撃砲弾（長距離砲もまじってい

たかも知れない」を撃ち込んできた。「ジュウタン射撃」と兵士たちが呼んでいた射撃法で、文字通りジュウタンを敷くように、次々と一面、至る所に弾がサク裂する。無気味なうなりを立ててとんでくる砲弾はますます激しくなる。

正午ごろ、やむなく司令部は移動を始めた。旅団長や参謀はタマの間をぬって民家を出たが、旅団副官の幡野清大尉（第三十三連隊出身）は、いったん民家を出てから「マントを忘れていた」といつてとってかえした。

このときだった。迫撃砲の一弾が、民家の入口に据えてあった無電機に命中、付近においてあった多数のドラム缶が爆発、一瞬のうちに火の海となった。焼け跡から幡野大尉の焼死体が見つかった。

司令部は、高地向こうの民家に引っ越した。翌二十五日「呉湾東方高地に敵侵入」との連絡が入った。敵は後方かく乱戦術にでたようだ。同夜、旅団長命令を受け、二十六日朝から第八中隊は攻撃にでた。だが敵はあなどれず、同夜ついに包囲されてしまった。



迫撃砲のやんだ一息、山の中の大休止

山の中腹に陣取る中隊に対し、敵は山中から手投げ弾を無数に投げおろしてくる。あたりが真昼のように照らしだされた。前田軍曹は（故郷は四日市祭だろうに、おれは大別山で手りゅう弾の花火を見る）と、くに残した妻子を思った。

ぐずぐずしていれば夜明けには全滅だ。小、中隊長を探したが見つからない。

（よし、おれが友軍に連絡してこよう）

決心した前田軍曹は、師団野砲の方角向け、単独ではい出した。

敵は向こうの山からも機関銃を撃ってくる。同士打ちを避けようと叫ぶシナ兵のわめき声が聞こえる。前田軍曹のまわりだけが妙に静かだ。草を踏む音にも神経をとがらせ、岩かげを見ては伏せてじりじり進む。谷を渡り、ガケをころげながら、どれくらいかかったろう。運よく目ざす野砲陣地にたどりついた。

事情を報告すると砲兵准尉が「同士討ちの危険があるがやってみよう」と決断する。夜明け近く、野砲弾を二発ぶち込んでくれた。敵はひるんだ様子だ。山腹で苦戦を続けていた第八中隊は、野砲が開いてくれた突破口から、ひそかに高地を脱出した。敵の一部は連隊本部の近くにも侵入、多数の戦死傷を出した。揚家寨（ようかさい）方面にいた大隊主力が到着、撃退戦をくり広げた。

前田さんはこの二、三日あと迫撃砲弾の破片を左背部に受け、上海を経て内地に送還された。「陰膳をすえてくれていた妻が、ふと茶碗をおとして割った。妻はこれを気にやんで一週間ばかり寝込んだらしいが、わたしが負傷したのがやはり茶碗の割れた日だった。また南京戦で下関へ行く途中、休憩した道ばたで、妻子の写真を見て眺めて部下にひやかされたが、子供が死んだのもこの日でした」と回想している。

前田さんは大正十五年兵、二十年三月に再び応召、山田隊に属して朝鮮に渡り、句容付近を警戒中終戦。

口をあいては死なん

——西井分隊長腹部盲管に苦もん——

### 沙窩付近の戦闘

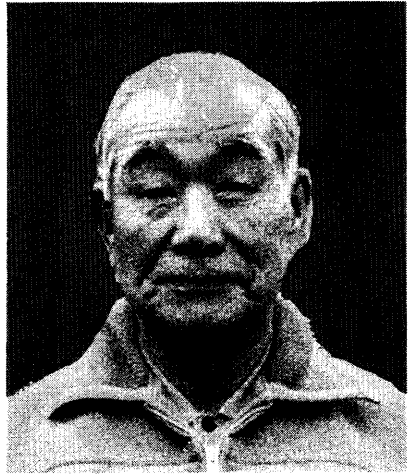
大別山戦闘中のエピソードを二つ紹介しよう。

稲垣勇さん(七三) 〓久居市二ノ町一丁目〓はこのころ第六中隊の指揮班で曹長だった。食物もとぼしく、山また山の連続で兵は疲れきっていたが、中でも年とった後備兵(予備役を終えた者が服した兵役)はまったく疲労こんぱいの極に達していた。部隊が前進するたびに「ダメだ、先へ行ってくれ」「とてもついて行けない、自分を捨てて行ってくれ」とすわり込んで動かない。だが戦場で部隊から脱落するほどおそろしいことはない。しかも同じ県人なのだ。

「しっかりするんだ」

稲垣曹長らは戦友を抱き起こし、背のうを自分が背負ってやって前進した。

どこの戦場であったか、交戦中に、内地から補充兵が到着した。弾の飛びかう中をはって第六中隊にたどりついたその補充兵は、荒い息を吐きながら到着の報告を伝えて、ともかく散兵壕にもぐりこんだ。ひと息つくとも気を落ちつけるためか、背のうの中から一箱のキャラメルを取り出して、同じ壕内の兵たちに、



今の稲垣勇さん

「どうですか」

と一個ずつ

配り出した。

最後の一個を

自分の口に入

れようとバク

ッと口を開け

た瞬間「グワ

ッ！」口から

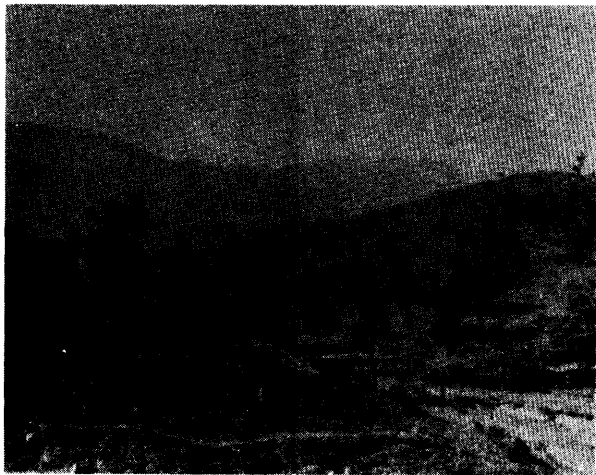
血のりを吐いてのけぞった。

「おい、どうしたのだ」

まわりの兵たちはびっくりして肩をゆすった。開けた口にキャラメルならぬ敵弾が飛び込み、ほおを貫通したのだ。

キャラメルはまだ彼の掌の中にのこったままだ。衛生兵がかけたが、止血できず、口中に脱脂綿をつめ込むとすぐ後方の野戦病院に送った。

稲垣さんは「戦場を知らぬ人には不思議な光景でしょうが、実際にこういうこともあるのです。そばで見ていて、まったく可哀そうでした。着任してものの十分もたたぬ間に負傷、後退ですからね。みんなに



平凡な山脈だが忘れることの出来ない磨盤山と大円山

内地の香を味わせようと配ったキャラメルだったでしょうに」

と回想している。

稲垣さんは昭和六年に現役志願、第三十三連隊に入隊、満州駐在に参加したあと支那事変で大陸を転戦、負傷の経験はない。大東亜戦争は防空隊で内地勤務、桑名で終戦を迎えた。

○

○

○

当時たいていの将兵は、壮烈な戦死、りっぱな最期をとげたいと願っていた。これもそのひとり、当時第三大隊歩兵砲の三番砲手（上等兵）だった浜口四郎さん（七〇）『鳥羽市鳥羽町本町出身』の語る西井小一分隊長（志摩郡浜島町南張出身）の戦死のもようである。

松野中尉戦死の翌日だから、九月二十一日と記憶する。白雲山（小馬凹地）にとりついた大隊砲は、前面の敵陣に第一発をぶち込んだ。チェコ機銃座が木っばみじんに吹つとぶ。（やったり）とばかり振りかえる浜口砲手。と、西井分隊長はつんと横を向き、その腰のあたりから煙が立ちのぼって消えた。この激戦中にたばこでも吸ってるのかと思つて声をかけると「ううっ」とうめいて膝を折った。敵弾は腰の包帯包（三角きん入れ）を貫き、腹部盲管だった。

「しっかりせよ」

浜口砲手が励ますと、

「おれは口をあいては死なんぞ」

とニガ笑いをする。



西井分隊長がニガ笑いした意味はこうだった。その年の二月ごろ武安近くの治陶鎮（じとうちん）一帯を討我中、ある川のふちに打ち上げられた味方の死体を見た。ぽかんと大きな口を開けて死んでいた。それを見た西井分隊長は、

「浜口、こんなみっともない死に方はしたくないのう、おれは口を開いては死なんぞ」といった。

沙窩の包帯所にかつぎ込まれた西井分隊長は、腹部盲管に苦もんしながらも、

「俺は口をあいては死ななかつたぜ」

と何回もくり返し、やがて息を引きとった。

浜口さんは支那事変は第三十三連隊とともに大陸を転戦、大東亜戦争は「特免」で神鋼電機で秘密兵器の生産にあたっていた。

### 敵陣の中、一人奮闘

——二郷上等兵仁王立ち、軽機連射——

### 沙窩付近の戦闘

激戦、苦戦を強いられた沙窩付近の戦闘は数々の武勲を生んだが、その中で特に語りつがれるべきなのは二郷頼平上等兵（尾鷲市矢の浜町出身）の勇敢な闘いだった。二郷上等兵のことだけは特筆すべきことと、川村可夫氏（当時第二中隊長代理）『一志郡嬉野町宮古』は、鉢巻山の激戦について、次のような回

想記を寄せられた。

第一線の第一大隊は二十二日から峰々が秋雨にかすむ磨盤山の攻略戦を開始した。磨盤山の前方、鉢巻山は中腹までは草地だが、頂上に近づくところの急斜面になり、山頂近くに木を組んだ鹿砦がめぐらされ、ちょうど鉢巻をしたような姿で、いつしかみな鉢巻山と呼んだ。鉢巻山までには二つの高地があり、第一高地は難なく占領した。第二高地は横広の丘陵高地で敵の側射をさけて同地を確保、鉢巻山頂上まで三百餘り、しかも突撃前進には左側の丘陵中腹の山道を縦隊突入するほかない地形であり、なお鹿砦の突破口を開かなければならないという悪条件の陣地である。

状況観察のため頭を出す敵のチェコ銃が火を吐く。兵隊は草原の裏斜面に伏して突撃の命を待っていた。大隊副官から第一線中隊長となった野田巳一中隊長の膝頭がかすかにふるえていた。この状況では突撃敢行しか手がないと幹部との相談がまとまり、大隊長と連絡して①大隊砲援護射撃のもとに鹿砦の一部爆破②大隊砲の突撃支援射撃③最後の白煙砲弾を合図で頂上に向かい突入する一を決した。

数分して工兵隊の決死隊が夕やみ間近の山頂に煙幕を張り突進、大隊砲がうなりを立ててとんで行く。鉢巻山との比高わずか十餘の超過射撃なので歴戦の兵士たちもキモを冷やした。やがて煙幕の中で大爆音が起こり、一瞬に鹿砦の丸太がとび散り、突撃は成功ノツイで大隊砲の白煙弾……重機の援護射撃のもと「それッ」と脱兎のごとく必死に頂上へ頂上へと勇敢に突進した。

山頂十餘位まで進出した時、右谷底から撃ち上げられるチェコ銃の側射と左稜線からの側射を同時に受

け、身をかくす死角もない、実に上手な陣地の構成だった。一時山腹に身を伏せた。

陽光もやや薄くなり、敵の掃射が一瞬やんだ。いまだ、と思った瞬間、むらがる飛鳥のように手りゅう弾が降ってくる。その落下点を見極めて身を反転させ、爆傷をさける。一斉射撃をさせて裏側に後退すると敵は頂上線に掃射を浴びせてくる。こんどはわが方の番だと頂上へ駆け上り、手りゅう弾を投げ、小銃、軽機の乱射を浴びせる。だが稜線の左右から機銃の掃射があり頂上に顔が出せないのが残念だ。こうして敵と味方の手りゅう弾戦が数回つづいた。

身を伏せながら上方を見ると、頂上近くで両足をふんばり、仁王立ちとなって軽機を撃ちまくっている兵士がいる。よく見ると二郷頼平上等兵だ。日頃は無口でおとなしい上等兵のその勇敢な姿に一同はびっくり、真の勇氣とはこのようなものかと、目撃した戦友の語り草となった。しかし二郷上等兵はかすり傷一つ負わなかった。この奮闘ぶりはただちに連隊本部へ上申され、殊勲甲が贈られた。この殊勲は万人の認めるところで、長い年月を経てもありありと思い出せる。彼は終戦後の二十一年に病死した。

さて、戦況は進展せず、中隊一同頂上のおどり込みを決意した。伊藤源五郎准尉が負傷、つづいて野田中隊長も手りゅう弾で片眼をやられた。(既報)血を流しながら野田中隊長の必死の伝令で増援部隊が送られてこまれ、いきおいづいた兵士たちは一挙に敵陣に突入、午後七時半日章旗を打ちたたてた頃は、すでに夜の薄闇に包まれていた。敵は中央直系の正規軍で頑強な部隊だったから、わが方も平素から勇敢な岡本昇上等兵(多気郡)が山頂近くで数発の敵弾を受けて戦死したほか、二十数人の戦傷者をだすという激戦であった。

## ラクダ山から攻撃

— 第三中隊 東西から攻め占領 —

## 磨盤山の攻略

明けて九月二十四日も戦況ははかどらず、東川伍長以下四人の戦死者と山門伍長以下六人の負傷者を出して日没となった。ただ第三大隊の右第一線の第十一中隊が午後一時から野砲の制圧射撃、機関銃一個小隊援護のもと東楼南方高地を攻撃、同二時五十分奪取した。

スキがあったら反撃しようとする敵の動きはいよいよ活発となった。前日おそくからこの日にかけて、姉妹連隊の奈良第三十八連隊第三大隊と山砲兵中隊が沙窩に到着した。しかし師団主力はまだ商城を出発しておらず、第三十三連隊は孤軍奮闘を続けなければならなかった。食糧、弾薬の補給は途絶え、連日の戦闘で部隊の損害、将兵の疲労はつるばかり。雨季でマラリアも発生しだした。

一方敵は訓練の行き届いた正規軍を続々増加してきた。とくに磨盤山最高峰には機関銃を持つ有力な兵力が移動しており、無気味だった。

午後三時、打破石に本部を置く山田連隊長は「明払曉、磨盤山に重点を置いて攻撃する」と作戦命令甲第三六六号を下した。攻撃は連隊が左第一線となり、磨盤山最高峰を、奈良第三十八連隊第三大隊と山砲一門が右第一線で沙窩西北方高地（標高九五九・五高地東方約千巔高地）を攻撃することに決まった。

翌二十五日は、数日來の雨は上がり、大別山の山々はその峰をくつきり現した。山田連隊長は、本部



大別山脈の山岳のカゲに天幕を張って雨露をしのいだ迫撃砲の合間

を置いた高地から展望、午前七時三十分第一線部隊に攻撃前進を命じた。

中第一線の渡辺第一大隊長は攻撃に先立ち、自ら敵情地形を偵察した。山頂につらなる高地にえんがい銃座、散兵壕、交通壕をめぐらした堅陣があり、そのうえ陣地の前は切り立った断崖だ。こうした状況から磨盤山最高峰を攻略するには東北方高地から攻撃をかけ、逐次最高峰の敵陣へ戦果を拡大することが有利だと判断し、第三、第四中隊を第一線とし、まず磨盤山東北のラクダ山から攻撃せよと命じた。

攻撃が開始された。一方、去る二十一日から揚家寨（ようかさい）方面で戦闘中だった第二大隊（三浦中佐は負傷をおして指揮）は、この日朝になって第一大隊の左翼に進出、第五、第六、第七中隊を第一線に東からラクダ山を攻撃、敵を東西から攻め、午前十時五十五分第三中隊がラクダ山を占領した。

第三中隊は一転して磨盤山に銃口をそろえる。ラクダ山に進出した第五、第六中隊、機関銃中隊は直ちに前面のろくさい（鹿砦）高地に攻撃をかける。右から第四中隊（機関銃一個小隊配

属)がこれに協力する。この攻撃にあたり、渡辺大隊長は野砲兵にろくさい破壊砲撃を要求したが、砲列と目標との関係で期待できず、このため第一線の第六中隊は午後零時三十分ろくさいに突入、敵手投げ弾、機銃掃射にもひるまずおどり込み、同五十分奪取した。

このスキに第四中隊が磨盤山東方高地に迫る。こうした第一線の猛進ぶりに、後方の砲兵大隊、配属の山砲中隊など重火器が最高峰を集中砲撃する。第四中隊は重火器と第六中隊の援護で突撃を決行、同三時東方高地を奪った。

両中隊はさらに攻撃を続けたが、西日をまともに浴びる不利な態勢になったので、渡辺大隊長は一時攻撃を中止させ、夜間攻撃を命じた。一方、第一中隊は磨盤山第一峰北方の鹿砦高地を攻撃、断崖の上から敵の十字砲火を浴び、多くの死傷者を出したが、同四時三十分占領した。

午後九時、第四中隊は夜襲を決行したが、稜線が狭くて攻撃力を集中することが出来ず、わずかに前方高地を奪っただけで断念した。渡辺大隊長は払暁攻撃をかけることにし、特殊煙を要求、二十六日午前二時発煙中隊の配属を受けた。この日右翼の第三大隊は右第一線の第三十八連隊と連絡しながら奮闘したが、小馬黄沖高地から側射され、進展しなかった。同日連隊正面の敵は八十八、八十七、三十六、三十師の四、五千、死体確認約六百、わが方は鶴口平蔵軍曹はじめ安達亥一、笹田楠雄、大橋正勝、鈴木実の各上等兵、山下一等兵ら十六人が戦死、西岡曹長以下三十九人が負傷した。

## 敵陣から手投げ弾

——上野出身、小谷伍長の鉄カブトへ——

### 磨盤山の攻略

磨盤山の攻略で、手投げ弾を鉄カブトにまともに受けた第三中隊の伍長、小谷弘さん（五十七年に死去）  
『上野市福居町出身』の負傷記録を紹介しよう。

右第一線で白雲山に猛攻撃をかけているのは姉妹の第三十八連隊（奈良）だ。わが第三十三連隊も負け  
てはいられない。だが磨盤山最高峰をめぐる攻防戦は文字通り死闘だった。敵は正規軍の精鋭だけにな  
なか勇敢で、死守していた。これまでの敵は「ウメボシ部隊」（腕にぬいつけた赤丸の章）と聞けば逃げ腰  
になったものだが、勇名も当面の敵には通用しないようだった。わが各中隊は、突撃のたびにおびたどし  
い損害を受け、各中隊とも健全な兵はわずか二、三十人ぐらいつつに減っていた。敵前約五、六十呎の散  
兵壕にひそんだ第三中隊は最後の突撃を敢行しようとしていた。九月二十六日である。同中隊の左翼には、  
前日磨盤山の一角を奪取した第四中隊が、第三中隊の突撃に火力をもって援護しようとしている。

攻撃は近くから開始された。わが火力は敵と比較にならないほど劣っている。中隊の軽機関銃六丁のう  
ち、五丁は使いものにならず、残る一丁も故障して単発にしか使いものにならない。それに射手もほとん  
ど戦死傷し、小谷軽機分隊もわずか二、三人だった。地形、火力とも敵が格段に優勢だった。だがわが方  
にも策略があった。それはこうである。



あゝ磨盤山占領

り最後まで残っているのは上陸以来の「つわもの」ばかりだった。

さて、敵はまんまとこの作戦にのって来た。二度、三度喚声だけの突撃で、手投げ弾が尽きかけたのか、投げ方が散発となってきた。(うまいことひっかかってくれた)

兵たちは壕の中でシタなめずりし、すかさず「ワァーッ」と、こんどは本当の突撃だ。小谷伍長は、(一番乗りをしてくれる!)と短銃をかざし、部下二、三人とともに敵陣におどり込んだ。ひょいと敵陣に取

「わあッ!」と大喚声をあげ、いよいよ突撃だと見せかけておくと、たちまち敵陣から雨、あられと手投げ弾が降ってくる。だが、兵士たちは手投げ弾のサク裂地域―敵前約三十呎の地点からは、前へ進まない。突っ込んだら、いくつ命があっても足りない。突撃と見せかけ、敵に手投げ弾をあるだけ投げさせ、消耗させる作戦だ。実際、新しい将校、相当数の兵が補充されても、彼らは三日ともたなかった。若い将校は「突撃ッ」と叫ぶや軍刀を振るって真っすぐ突っ込み、たちまち死傷した。補充兵たちは、古参のシリにくつつき、そして敵ソ撃のエジキとなった。こうして、やは



りついたとき、むくむくと姿を現した敵兵がやにわに手投げ弾を投げつけてきた。手投げ弾は鉄カブトにまともにサク裂、鉄カブトはこっばみじんにかつとび小谷伍長は谷底にもんどり打って失神してしまつた。

何時間ほど経つただろうか。気がついたが目が見えない。衛生兵をさがし求め、包帯をしてもらう。幸い命に別条はなかったが、額は茶碗をかぶせたほどはれ上つていた。血も流れている。夕方近くなつてやつと視界が定まつた。直ちに前進して第一線に参加、午後九時ごろ占領した。同夜第三中隊はわずか十四人という戦力で、最高峰の警備についた。

「戦い終わった戦場の夜ほど静かで無気味なものはない。昼間、あれほど勇敢に突撃した兵士たちも心細くなつて「オーイ」「オーイ」と壕の中で呼び合つたものです」

午前三時ごろから敵は二回にわたつて夜襲をかけてきた。支那軍お得意のチャルメラ・ラッパを鳴らし、二、三十名の地点までかけ上がつてきては手投げ弾を投げつけてくる。サク裂する光の中に照らし出された彼らは白ハチ巻き、白タスキ姿の決死隊だ。昼間分どつた手投げ弾を投げ、岩石をけおとして撃退した。「後方に黒装束の督戦隊がいるのですね。いったん退却した敵は督戦隊にどなられてやむなく逆襲してくるわけです。まだ若い兵ばかりで、ちょっと同情してやりましたよ」

二十八日、三中隊はその一部だけを残し、一中隊と交代して後方へ下がり、休養した。小谷さんはこのあと追撃戦で傷が悪化したため一時後退したが、手術をきらつて漢口の手前で本隊に追及した。

## 磨盤山最高峰を占領

——煙幕が山頂包み、敵の目遮断——

## 磨盤山の攻略

磨盤山最高峰を前に二十五日夜を徹した第一大隊は、明けて九月二十六日、是が非でもきょうは落とすたかった。未明に配属された第三中隊が第一線、その左から前日磨盤山の一角を占領した第四中隊が火力で援護しようと待機している。砲兵の援護射撃のもと前進したが、敵は岩かげからチェコ、手投げ弾を浴びせてくる。地形は切り立つけわしい岩石だ。このころ、幸い風向きが下から山頂へと変わった。待ち構えた発煙中隊が発火する。たちまちもうもうたる煙幕が山頂を包み、わが方を敵の目から遮断した。

その間に一線は突っ込む。第三小隊長谷口好准尉は一気に敵陣へおどり込み、軍刀で数人を切り倒したが、数発のタマを受け戦死、連隊戦闘詳報も「鬼神を泣かしむる」と記録してはめたたえている。

白兵戦の末、八時半に最高峰真下の高地を占領、さらに砲兵の三分間の猛攻の合い間をぬって最高峰に接近、煙幕の中を一気に突っ込み、同九時五十分、ついに磨盤山最高峰を占領した。連隊長は旅団長から直接電話で祝辞を受けた。

右第一線の第三大隊方面はこの日も進展をみなかった。

この日朝から、わが方の後方かく乱をねらった敵が呉湾（ごわん）付近に出没、旅団長から一部隊を派遣せよとの命がきた。このため連隊長は揚家寨高地に兵力を集結中の第二大隊主力に命じ、同二時第六中



戦闘惨烈を極めるも富岳の重きをなした山田連隊長

磨山西方の第二望楼付近へ戦果を拡大しようと企てたが、磨盤山の南方には同山と同じ高さの山がそびえており、敵は強固な機銃座を設けていた。そのうえ、砲兵の援護が期待できないため、一時攻撃を断念することにした。

一方、後方かく乱を狙う敵の動きは活発となり、各所で敵の逆襲が起こった。このままでは連隊は敵に

隊、機関銃二個小隊、大隊砲小隊を呉湾方面に出動させた。磨盤山最高峰、およびその東西の線に陣していた約五千の敵は二、三百の死体を残し、南方高地へ後退した。連隊は谷口准尉はじめ畦地安太郎軍曹、柴原善一郎伍長、森善三、田中春吉、村田久次郎、山下清七、中山金一各上等兵、森正三、伊藤惣伍、岩城哲一、坂本元一各上等兵ら十九人の戦死と、小黒軍曹以下二十一人の負傷者をだし、馬の戦死傷も四十頭（うちシナ馬十三）を数える損害をだした。

○ ○ ○

翌二十七日、第一線各部隊は払暁から磨

包まれてしまう。そこで第二大隊は第五中隊（機関銃一個小隊配属）を揚家寨に残し、主力は呉湾の敵を撃退するため八時三十分出発、二十八日午前零時清水塘東側まで進出した。

磨盤山を確保する第三、第四中隊方面も逆襲を受け、一方右第一線の第三大隊方面も午後三時ごろ赤ハゲ高地に約三百人が侵入、一時間ほどで撃退したが、再び七時ごろ約三十人が大隊本部付近に接近、ただちに八人を殺し撃退した。そして山砲などの援護のもと第十二中隊を第一線に第一望楼高地を攻撃、午後四時半占領した。

一方、旅団司令部（既述）連隊本部方面も敵におびやかされた。こうした敵の攻撃に対し、連隊將兵の疲労は極に達し、マラリア患者も続々発生、最悪の状態に陥った。

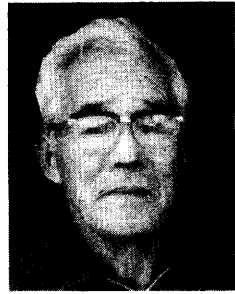
この日大西軍曹はじめ村長蔵、山口一美、田所隆郎各上等兵、轟進、太田庄一、田中功各一等兵ら十六人が戦死、吉田准尉以下十七人が負傷した。

### 発煙中隊、行動を開始

——豊田さんガス弾撃つが敵衰えず——

### 磨盤山の攻略

苦戦を強いられ、長い戦いとなった磨盤山の攻略には、発煙中隊の活躍が大きかった。戦死者が相ついだ同中隊の数少ない生き残りの一人である豊田八郎さん（七〇）Ⅱ一志郡一志町波瀬Ⅱは、当時のように次のように語っている。



今の豊田さん

第三大隊第十二中隊（久我豊三中隊長）に所属、沙窩に向け行軍中の豊田さんに発煙中隊編入の命令が下ったのは九月五日、四十名の徹夜行軍のあけく廬州に着いた時だった。各中隊から一個分隊ずつ配備で百五十人編成、中隊長は松岡久郎中尉だった。

発煙中隊というのは、特殊な催涙弾をうちこんで煙幕を張り、突撃を有利にしようとする作戦のため臨時に編成されたもので、連隊本部直轄。

豊田さんらは「赤筒」と呼ぶガス弾（パイナップルの缶詰めを少し大きくしたようなもの）の構造やたき方の説明を受けたあと、大別山に向けて出発、夜を日についての行軍だった。

「後方に残った敵と戦闘をくりかえしながらの行軍で、沙窩北方高地望楼付近で上野善松君（伊勢四郷）が迫撃砲のため負傷、一日待機したこともありました」

同地で軍旗中隊となり、二十日午後沙窩に入城した。行軍の道々、磨盤山でのわが軍の苦戦のようが伝えられてくる。一刻も早くお役にたちたいと気があせる。しかし命令が下らないまま歩哨の任にあたったり、休養中は魚をとって食糧の足しにしたりする。

いよいよ二十六日、第一大隊の渡辺綱彦大隊長は鉢巻山の払暁攻撃を決行することにし、同午前二時、発煙中隊（二小隊）の配属がきまった。

「さあ出番だ！」

豊田さんらは行動を開始した。豊田さんは従軍日記を克明につけている一人だが、その時のもようをこ

う記している。

二十六日、晴れ、月曜日。

午前三時半起床、第一大隊ガス使用につき発煙筒、毒煙等沙窩城内に取りに行き、第一大隊の所まで運搬する。本部帰着六時半。沙窩北方二キロの地点に敵あらわれ、午前八時ごろ連隊長命令にて、第六中隊一小隊と発煙中隊一個小隊で攻撃、夜中に入る。山上にて警戒、松尾君戦死。

二十七日、晴れ、火曜日



初年兵入隊当時の豊田さん

昨夜来より警戒。敵は依然として抵抗を続けている。昼前一名戦死、午後敵の大部隊五、六百が逆襲、わが小隊は十八名、午後三時小隊長の吉田准尉、上胸部貫通銃創の重傷のため堀内と自分で野戦病院へ運搬。(略)

防毒面をかぶり、赤筒二個ずつを背負って一個分隊(十人)で行動、「五分間で八合目までのぼれ」小隊長の命令、豊田さんらは必死でよじのぼっていく。敵陣二、三百メートルに迫っても敵のかげは全く見えない。ガス弾をうって敵兵をいぶし出し、出てきたところを射つのが狙い。「ガス弾をうつのが精いっぱい鉄砲

をうつことは出来ませんでした」

犠牲者はふえる一方、仲間がづきづき倒れていく。「ガス隊は、ガスを射ったら退ってよろしい」という命令が出たおかげで、豊田さんらは命拾いしたという。登ってはガスをうち、そして下りるといふことが何日も続いた。しかし敵の抵抗は衰えない。軍の兵力は減る一方、交代するはずの第九連隊（京都）はなかなか来ない。業を煮やした山田連隊長が「早く交代を出せ、来なければ第三十三連隊は兵力半減してでも漢口に突入する」と、すごい剣幕で電話しているのを豊田さんは聞いた。しかし結局第九連隊は来なかった。

十月十九日にやっと占領した頂上の警備をガス中隊の第三小隊が命じられ、夜中に歩哨に立っていると、自ら上線に来た山田連隊長は「歩哨、ここでは流弾にあたるからこちらへ来い。敵は黙っては来ない、弾をうちながら来るからその時対応すればよい」と、山上より手前に歩哨の位置を決めて帰った。

「兵思いの連隊長の心には頭が下がり、うれし涙がでて、期待にこたえたいと思ったものです。しかし防毒面装備は苦しく、一度射って逃げるときマスクをぬいたら、風のおおりでこっちがまともに受け、あの時は死ぬのかと思いました」と豊田さんは当時を回想している。

豊田さんはその後麻城、河口鎮、礼山、広水付近を転戦、十一月四日ガス中隊は解散、十四年六月復員した。「満州事変、支那事変とも私は無傷、無病でした。戦闘では、一番か二番にとびだすこと、それが弾に当たらないコツです。こわがって人のあとにつくと狙われます」というのが豊田さんの戦闘哲学である。

ガス隊にいる時豊田さんは久居の別所常雄さんが重傷を負って担架に乗せられ下山するのに出会った。

アバラ骨が見えていたのもうダメかと思っていたら、終戦後久居駅で元氣な別所さんにバッタリ出会い「おお生きていたのか」と思わず言ったほどうれしかったという。

### 池干しあげマスとり

——連絡路の堤防切り大目玉——

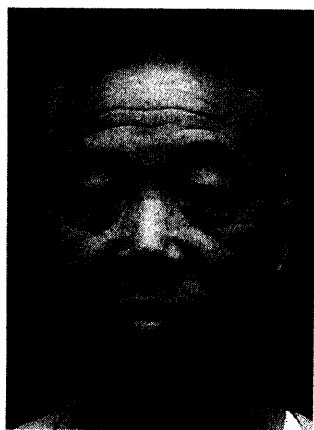
### 磨盤山の攻略

郷土部隊の激戦中に、後方陣地の連隊砲中隊がふんどし一枚で池を干しあげ魚をとっているのを連隊長に見つかり、大目玉を食ったという、戦場でのひとときを伝えるエピソードを紹介しよう。

磨盤山攻略中のことから九月二十五、六日ごろである。連隊砲中隊は山頂に陣地をしき、松の木で擬装して砲口だけを敵に向け第九中隊（中隊長太田雄三中尉）の援護で対山の敵陣に猛火を浴びせていた。

山ふところに連隊本部を置き、水谷一生師団参謀が連絡に当たっていた。ところが連隊と師団（寧陵付近）の間に敵騎兵が割り込んできたため、連隊は後方師団との連絡をしゃ断されたままになっていた。

弾薬の補給もなく、食糧はもう一週間も前から米一粒もない。将兵は山腹の畑から“大別山イモ”を掘っては生で、あるいはハングウでむして飢えをしのいでいた。また敵弾をぬって水田の稲



今の安田治さん



穂を刈ってきては鉄カブトでついて食った。弾薬小隊や予備兵のいる小屋のすぐそばにはマスの養魚池があった。一帯は段々畑になっており、大は百畝四方からの大小いくつかの養そん場があった。空腹にたえかねた兵士たちは、

「この池を干しあげてマスをとろうや」

ということになった。ところがその池の堤防が実は旅団本部と連隊本部との最短連絡路であることを兵士たちは知らなかった。

これを察した山田連隊長が通りすがりに、

「絶対に堤防を切ったらいかんぞ」

といいつけて行ったのに、兵士たちは堤防を切ってしまった。約三十人の兵士たちは、まったくの裸になり、ワイワイ騒ぎながら水を落とし、魚をつかまえて回った。なにしろ養ソン池だ。三十歩ほどのマスが面白いほど捕まる。兵たちはすっぱだかで騒ぎながら、焼いては岩塩で味つけして食った。どの顔も満足げである。まだ三人の兵が池の中で水しぶきをあげて走り回っている。

「おい、もうそれぐらいでやめろよ」

「いやまだまだ……」

などと騒いでいる時だった。

「コラッ！」

突然の大雷落。連隊長が顔を真っ赤にして立っていた。

「貴様らはッ、おれがあれだけ切るなといったのに。何事か」

泣きべその兵士たちが堤防の切断個所に目をやると、なるほどセキを切った池の水は砂地の堤を押し流し、二層ほどにも大きく切れてしまっている。(たいへんなことになってしまったぞ)兵士たちはいよいよなだれた。

一方、山頂で砲撃を指揮中の安田砲隊長の所に連隊長がとなり込んできた。

「貴様、なにをしているか」

「――」

安田砲隊長は寝耳に水、部下の失策を知る由もなかった。カンカンの連隊長は責任者の安田砲隊長に重謹慎一週間を言いわたした。(もちろん戦闘はそのまま継続だ。)

さて、せっかく取った魚を没収された兵たちは「連隊長もうまいうまいと食ったのに、食わせたわれわればかりが重営倉とはこれいかに」と不満。最後まで池に残っていた兵三人も減俸を食ったらしい。これに対し連隊長いわく「連隊の作戦上の通路を切った兵は、中国兵と同罪である」と。

この話は連隊砲隊長(大尉)安田治さん(亀山市天神町出身)や同中隊上等兵、井東末光さん(伊勢市岩淵町出身)らにきいたもの。鈴鹿市小谷町、村木長男さんや、同市算所町、田中藤五郎さんも魚をとって大目玉を食った一人である。

## 郷愁かき消す銃声

——磨盤山の第一中隊敵襲で中隊長失う——

### 敵の大逆襲

二十七日から二十八日にかけて、わが部隊の後方かく乱を狙う敵の攻勢はますます激しくなり、一時は沙窩東南方に位置した旅団司令部付近にも出沒、旅団長以下危機に陥った。二十七日など「わが後方に進入せし敵は清水塘東側高地近くまで侵入せり」との連絡で、連隊長は午後三時半予備の発煙中隊の一個小隊を出動させ、撃退に当たった。

二十八日になってやっと師団主力が余家集に到着、吳灣方面の敵は進出してきた第三十八連隊と、前日から同方面に向かっていたわが三浦大隊（第二大隊）によってハサミ打ちし、西北方に撃退した。

この日揚家寨を確保している第五中隊、機関銃一個小隊（島田勝巳大尉）方面にもチェコ二丁を持つ約二百の敵が同高地東側高地に襲来、守備隊の側面を攻撃した。半小隊を出して撃退したが、敵はさらにラクダ山の右側高地にも出沒、このため第一大隊や連絡本部との連絡は困難に陥った。

一方、第三中隊主力と交代して磨盤山最高峰を警備していた第一中隊（日紫喜錦一中尉）及びその西北側の鉢巻山を確保していた第三中隊一部の方面は四回にわたり、約三百の敵におびやかされた。

連日の戦闘でわが戦力は落ちる一方、第一中隊は日紫喜中尉（員弁郡出身）渡辺修少尉（伊勢市古市町

出身）以下わずか三十数人に過ぎなかった。

山々がたそがれて将兵たちがいやがる夜がやってきた。それぞれ思い思いのかっこうで守備を固める。夜露が降りると山頂の冷氣はいっそう身にしみる。草むらで虫が鳴きはじめた。「内地も秋だろうな。稲も実るころだ」だれかがしんみりつぶやく。「故郷が恋しいなあ」と空を仰ぐ将兵の疲れた顔に、星の光が降る。時々、ムシの声をかき消すように銃声が響く。

やがて左翼で銃声が起こり、山の下から赤い信号弾が数発上がった。将兵は緊張する。（夜襲の合図ではなからうか）日紫喜中尉、渡辺少尉が顔を見合わせたとき「敵襲だ！」ヤミの中で歩哨の叫び声が起こった。銃剣を構え、前方に目を光らす。しばらくすると前方にうごめく黒影がだんだん大きくなって近づいてくる。四、五十呎まで迫ると手投げ弾をバラバラ投げ込んできた。

「突っ込め」

突然叫んだ日紫喜中尉は、軍刀を振りかざして突進、渡辺少尉も兵もこれに続く。

「がん張れ、がん張れ！」

日紫喜中尉の声が響きわたる。将兵は稜線に伏せて撃ちまくる。敵はどんどん兵力を増してくるばかり、しかし突撃もしないし退却もしない。神経をすり減らす対峙戦が一時も続く。ハラを決めた日紫喜中尉はふたたび「突っ込め」と叫んだ。

手投げ弾の雨をぬって敵中におどり込み、たちまち右、左に血祭をあげる。だが敵弾の一発は日紫喜中尉の頭に当たった。どっとその場に倒れたが、軍刀をツエに立ち上がろうとする。が、その力はなかった。

「隊長ッ」

と絶叫してかけよる渡辺少尉、その胸に抱かれた中尉は「せっかく奪った磨盤山だ、あとを頼む」の一言をのこして息絶えた。腕時計は十一時を少し回っていた。

隊長を失った中隊は渡辺少尉指揮のもと奮戦、同四十分撃退した。しかし敵はなお執拗に、あけ方まで四回にわたり逆襲、最高峰の右側高地を守る第三中隊二個小隊も奮戦を展開していた。偵察にでた松岡久郎中尉（発煙中隊長）の連絡で、この方面には発煙中隊一個小隊が増加された。

この日の戦闘で連隊は日紫喜中尉以下二十三人が戦死、木田充之助少尉以下三十五人が負傷した。

○ ○ ○

第一中隊指揮班一等兵だった杉田利正さん（六〇）〓四日市市河原田町二〇四八、津パール取締役〓は「敵襲だと気づいたときには、敵はすぐ目の前に迫っていた。接近しすぎたため、敵の手投げ弾はわれわれの頭を越え、後ろでサク裂した。中隊長は短銃で奮戦中、腹を射ぬかれて戦死したと記憶している。われわれは銃じりで敵と格闘、タマが尽きると石を投げて防いだ。中隊長は温厚で部下思い、この夜はとくに警戒を厳重にせよと厳命していたが、あれが死の予感というものだろうか。私は初年兵で古参兵にしかられ



奪取直後の敵散兵壕

どおでしたが、おかげで支那事変は無事で帰りました。その後死線をさまようことが幾度ありました  
が、あの苦しい闘いを生きぬいたのだから、このままでは死ねないと自分を励ます力となりました」

と鉢巻山の戦闘を回想している。

杉田さんは昭和十二年兵、大東亜戦争でも同連隊で比島作戦に参加している。

### 敵狙撃弾にのけぞる

——中村上等兵「母許せ」と言い絶命——

### 苦戦する連隊

九月二十八日、わが後方のかく乱をねらって約三千の敵が呉湾方面に行動、このため第二大隊（五中隊）  
が出動した。

この日、第六中隊第一小隊だった横山孝三さん（七五）『久居市新町』は、部下の戦死に直面した。予備  
隊の横山小隊が高地のふもとで又銃（銃を組んで立てかける）して昼食中、突然道を距てた小山から襲撃  
を受けた。不意をくらった味方は混乱、武器をほっぽり出してわれ先にと山頂へかけ上がる。山頂には第  
七、第八中隊の陣地があるからだ。横山少尉も手投げ弾を二、三個ワシづかみにすると、部下をうながし  
て山の左側を駆け上がる。このとき中村岩一上等兵（南牟婁郡出身）が「小隊長殿ッ」と叫びながら、約  
百呎右側からかけ上がってきた。横山小隊長の指揮下にはいろいろと、顔を真っ赤にして懸命に走ってくる。  
たちまち彼をめざして散弾が集中する。「あぶない、気をつけろ、中村」

絶叫したが遅かった。あつという間に中村上等兵は敵ソ撃弾にのけぞった。

「中村ッ、しっかりせよ」

横山少尉はわれを忘れて山をかけおりて抱きおこした。

「小隊長どの」

ニコリ笑おうと口を動かしたが、口をまともにやられていて、どくつと鮮血を吐いた。かけつけた軍医は「時間の問題だ」と首を横に振るだけだった。

前項のようにやがて敵は第二大隊と第三十八連隊のハサミうちにあつて西北方の山岳へ敗走して行った。

その夜、中村上等兵は危篤状態に陥った。

「しっかりせい、傷は浅いぞ」

と横山少尉が励ますと彼はかすかにうなずき、そして「お母さん許してくれ、お母さん」と言つて絶命した。息絶えた瞬間、涙の玉が一つこぼれ、ほおに筋をひいて流れた。横山少尉は彼のなきがらを抱いたまま、しばらく動かなかった。翌日、火葬のため藁ごう（腰に帯びた弾薬箱）を開けたら生イモが一つころがり出た。彼は戦死の前日も「一粒でよいから米を食つて死にたい」ともらしていたのを思いだし、横山少尉は「米のめしを食わせてやりたかった」とつい涙をこぼした。

食糧の補給はとだえたまま、そのころ郷土の将兵は大別山イモやダイコンばかりかじつて飢えをしのいでいた。

中村一等兵は徐州会戦のあと休養の最中、耳掃除のさいにバイ菌が入って悪化、天津の病院で治療していた。部隊が武漢攻略に出動する気配を察し「ぜひ、連れて行つてください」と横山少尉にせがんでいた。

「お前のからだではまだ戦闘はむりだから、むちゃせずに廬州の病院で治療を続けろよ」

と、止めたが、中村一等兵はきかなかった。そしてある夜、横山少尉が寝ている枕元にきて、身の上話をはじめた。屋根のない民家には星の光がいっぱい降りそそぎ、そのせいだろうか、中村一等兵の顔は青白かった。

「小隊長どの。自分は妹とたった二人きりです。自分はシャバにいるところはチンピラで気が荒く、村中のきらわれ者でした。母親もそれを苦にしたまま死にました。出征のときも厄払いをするような見送りを受けました。そこで自分は決心しました。りっぱに戦死して帰ってやると誓ったのであります。だから病気では内地へ帰れません。大別山にぜひ連れて行って下さい」

真剣に、懇願する彼のことばに動かされた。しばらく思案した横山少尉も「よし、いっしょにこい」と許してしまった。こうして彼はふらつく頭をかかえ、足を踏みしめて廬州から商城まで脱落せずに行軍、大別山の戦闘に参加していたのだった。

横山さんは「中村上等兵の戦死は津市白塚、小児科医、長谷川芳郎軍医も見ているはずですよ。彼の最期は忘れられません」と、部下の冥福を祈っている。横山さんもこのあとすぐ負傷して除隊、十四年に特別志願で福知山第二十連隊配属将校、ついで独立歩兵恵部隊本部付となり、中国の長家口で終戦。



## 敵3千人が連隊包囲

——松島一等兵ら全滅を覚悟——

### 苦戦する連隊

九月二十八日。後方かく乱のため連隊の背後に侵入した敵に沙窩で包囲された第三機関銃中隊弾薬小隊一等兵、松島助一郎さん（七二）Ⅱ松阪市殿町、歌人Ⅱの忘れ得ぬ体験を紹介しよう。

そのころ部隊の精銳は沙窩の前方に連らなる鉢巻山、西山高地、大剣山、磨盤山に広がっており、沙窩鎮には輜重隊、衛生隊、弾薬小隊、戦傷者など、いわゆる後方部隊約二百人が残っていた。うち七割が戦線からタンカで後送された負傷者だった。敵は右手にかすむ白雲山に観測所を設け、味方の戦線に確実な砲撃を加えているが、幸い沙窩鎮は死角になっていた。

松島一等兵ら弾薬小隊は第一線への弾薬補充の往復に息つくひまもなかった。一方おびただしい負傷者が連日かつぎ込まれてきた。

そこへ敵大部隊（約三千と推定）が、突然侵入してきたのだ。敵砲弾が城内にさく裂、大混乱となった。なにしろ銃をもって戦えるものはわずかに六、七十人、しかも衛生兵や自動車隊という、最前線の経験のない兵ばかりだ。砲弾のサク裂したあとの土煙の中から「やられた」と戦友たちの悲痛な絶叫が聞こえる。

一方、商城への負傷兵を運ぶ途中の輜重隊も各所で襲撃され、捕えられたりして全滅した。日が落ちる

といよいよ心細くなる。砲撃の合い間の静けさの中に、敵の近づく気配がする。全滅を覚悟した兵たちは「せめて、いさぎよく死のう」と握りなれない銃をとり、負傷兵たちもある者は銃をつかみ、ある者は手投げ弾を構えた。松島一等兵も「あすの朝までの命か」と死を覚悟。

ひっそりと星またたかずこよいわが生命おわらむときは近づく  
と歌を詠んだ。

まもなく敵は西城門に近づいた。松島一等兵は銃を握りしめ城内にかけつける。ふと、足をとめて仰いだ空に糸の月。突然命に対するいとおしさが胸にきゅっと迫った。

われらついに包囲されたる夕まけて城門に走りいづれば織（ほそ）き月見ゆ  
と詠んだ。

味方は手投げ弾と突撃で敵を迎え撃つ以外になかった。だれかが叫んだ。「そうだ。高射砲があったのだ」口々に叫ぶ。どの顔もパツと明るくなった。大別山脈の地形の関係で、高射砲を最前線に運ぶことが出来ず、沙窩鎮に待機させていたのだ。

「ドカン！」



当時の松島一等兵、中国にて

ゼロ分角（水平）で高射砲が火を吐く。着弾点がバツと明るく照らし出された瞬間、ひとかたまりとなつて肉薄してくる数十の敵影がこっばみじんに吹つとぶ。高射砲は猟銃のような散弾方式で、破裂すると約百呎四方に鋭い破片が飛び散り、ゼロ分角で発射すると歩兵一、二個中隊を破壊する威力がある。この高射砲をぶつ放したのだからさすがの敵大軍も大損害、あわてて退却した。あたりが白んでくると敵が退却した沙窩鎮はウソのように静まり返り、兵たちの吐く荒い息にまじつて虫の音さえ聞こえた。松島一等兵は手帳をとりだし、

朝はれて草に啼（な）くなる虫聞けば、昨夜（よべ）のかなしき決意おもほゆ  
としたためた。

松島さんはある事情で万年一等兵だったが、当時から歌人であった。津の励精中学（いまの津商）二、三年のころから短歌をはじめ、アララギ会員になり岡麓に師事、のち「伊東拓雄」のペンネームで年間五百から一千首の歌を詠んだ。明治大学在学中脚氣にかかり、帰郷療養中に受けた昭和十一年の徴兵検査で意外にも甲種合格、第三十三連隊に入隊、すぐ出征した。生きては帰れぬものと覚悟し、戦場でも歌を詠み、歌誌「アララギ」「青藻」に投稿を続けた。その歌集「戦場」が出版されたのは支那事変の末期、十四年である。

「38年過ぎ罪負ふ思ひ」

——松島助一郎氏前衛短歌に異常さを——

松島助一郎一等兵の歌集「戦場」が青藻社（富田町西町）から青藻社叢書第十四編として出版されたのは昭和十四年十月である。これには、出征から漢口攻略戦まで、松島さんが二十一、二歳ごろの約三百首がおさめられている。もちろん当時のことで憲兵の検閲を受け、悲惨な戦闘場面を詠んだ歌や部隊の行動メモは全部削除された。「戦場」が出版されるや、がぜん反響を呼び、伊毛源の歌集「江南戦線」と並んで愛読され、翼賛会はこれを愛国思想発揚の材料とした。

松島さんは大東亜戦争では比島攻略戦に参加、三たび召集され朝鮮の平城で編成された飛行大隊（飛行場の護衛）に所属、中国の済南を経て、朝鮮の大邱（たいきゅう）で終戦となった。その間詠んだ歌の中から五百首を選び、装てい川端竜子、題字本間雅晴中將を得て、東京創元社から「新戦場」と題して出版される運びになっていたが、出版社の被災と終戦で日の目を見ずに終わっている。前回引用した沙窩鎮の戦場の歌も「新戦場」におさめられる予定のものだった。

当時、川田順とラジオ放送したこともあるし「土げむり飛び血まつあがる中にして、何をか思はむ、天皇陛下」は服部正作曲、永田絃二郎等の朗唱で、また「暁に戦死と覚悟し敵壕に近よりたるわれ母など思はず」などしばしば放送された。当時売れっ子だったわけで穂積忠の「現代日本短歌史」にも引用されている。

「若いころ私は久坂玄瑞（長州藩）に傾倒した。わたしはいまでも右でも左でもないが、当時は愛国思想を教えこまれ、そこから必然的に生まれた歌ばかりです。二十二歳の年、自分を反省して『われら若く世界の戦繁きなかにありて思ふことのとほしきかもよ』と詠んでいる。敗戦で百八十度転換した作家もいるが、わたしはそんなまねは出来なかった。だから愛国主義者ににらまれたこともある。現在も歌は続いているが、多作しなくなった。穂積さんの現代日本短歌史にわたしの歌を相当引用しているが、客観的に取り上げているだけで、当時の私の思想の背景がくまれているのが残念だ。実際戦場では誰もが異常精神になっている。人を殺すことを何とも思わない。味方の砲撃で吹っとんだ敵陣を見て得意になったものだ。そんな中で生まれた歌ですよ。従ってわたしとしては前衛短歌、俳句は精神のひとつのあり方として、そういう方向に向かうのが当然だと考えています。『新戦場』はいずれ自費出版したいと考えています」

中学の同窓で同年兵の戦友はほとんどレイテで戦死、現在は浅原大忍（松阪市）中北健三（伊勢市）さんら三人しか残っていない。

「戦場」から、松島さんの歌を二、三引用すると……。金郷戦のあと静まった夜の戦場を、『軍律きびしき中』に見捨てて傷ついた戦友を探して回る。「○○上等兵ノ」「××一等兵はどこか」と戦友たちが呼んで回ると「おーい」と苦痛をこらえて助けを求める声もあれば、こだまだけがむなしくかえってくる場合もある。この悲壮な情景を詠んだのが、

あおあおと暮れて静まる戦場に戦友を捜す声中天にひびきぬ

戦友の血潮染めたる岩が根をすべりつつ進む死ぬべしや今

岩かげにうつらうつらとをりにしが夜風に覚めて母を呼びにき

(紫金山にて)

三たびばかり突撃をくり返しし戦友は四度目からだ裂けて死にたり

(大別山にて)

折りにふれ故郷を話してむつびたる戦友は機関銃を撃ちつつ死ににき

(渡辺信夫上等兵、鉢巻山頂に戦死のとき)

そしていま、

語れざる戦のさまは昨日のごとくにて三十八年過ぎ罪負ふ思ひ

(歌誌「創作」十二月号掲載)

と心境をよんでいる。

## 将兵ら死を覚悟

——初めて見た見た堅固な山岳陣地——

## 西山高地攻略

あくる九月二十九日、大別山脈はまた雨が降りだした。こぬか雨である。弾薬、食糧の欠乏が続き、わずかに大別山イモで飢えをしのぐ。連日の戦死、戦傷、マラリアの発生等で部隊の戦力は低下の一方、将兵の疲労に加えて敵の攻勢は活発化するばかりで、戦況は進展を見ないまま、この日も蔵本以下十人が戦死、小浜軍曹以下二十四人が傷つき、日没となった。

連隊本部は第一線将兵のがんばる磨盤山ろくの一軒家に進出、同夜十時二十七分、作命中第三七五号を下し「連隊はいぜん現在地を確保し、敵状地形を搜索、機をみて前方に地歩を獲得せんとす」と南方高地

への戦果拡大をうながした。また第一、第三大隊の戦闘地境も変更、磨盤山及びその南方の西山高地（一〇三高地）方面へ逐次兵力の集中をはかった。

翌三十日も占領地の確保のまま、戦死傷者もなく暮れた。

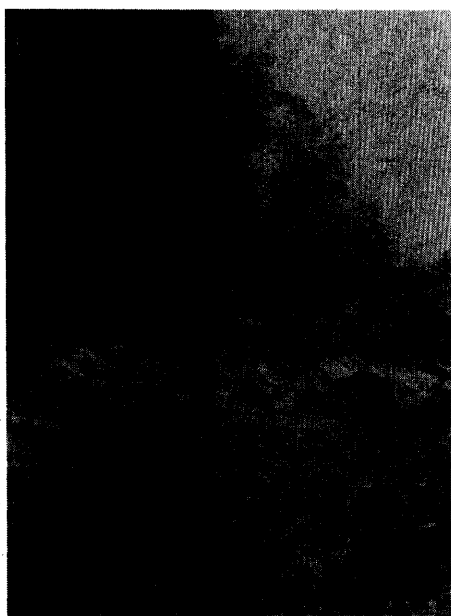
しかしこの日、師団主力の先頭がやっと光州街道からの先遣隊つまり第三十三連隊の後方に進出、すでに白雀園付近で交戦にはいつていた。（同日午後八時半下達の作命甲第三七七号）この間にも連隊南正面の敵は兵力を続々増加し、陣地を固めている。不気味なうちに九月が終わった。去る十八日に戦闘を開始以来、十三日間で連隊の損害は戦死百九人、負傷二百七十一人を数え、このほか三浦中佐をはじめ軽傷で第一線に踏みとどまっている将兵が多数あった。

こうして戦線は十月を迎えた。一日午前十時十分、磨盤山の東方約二キロの地点にある楊家寨（ようかさい）を準備している第五中隊、機関銃一個小隊の島田勝巳大尉（第二機関銃中隊長）から「ラクダ山東側高地に進出した一部の敵は、その付近に陣地を構築していたが、今朝来の搜索によるとすで



戦場で雨は嫌だ 大別山中の連隊本部

に退却し、同方面には敵なし」の連絡がはいった。この日も負傷一人の損害で暮れた。



雨は降る降る人馬はぬれる  
越すに越されぬ大別山と歌った

しかしこの間、磨盤山を足がかりに、その前方にある西山（一〇三高地）をはじめ南方高地攻略への作戦はめぐらされていた。

磨盤山から約三百呎前方に谷一つへだてて起伏する西山高地は連隊がはじめてぶつかった堅固な山岳陣地であった。山の中腹には高さ二呎余の鹿砦（ろくさい）をがんじょうに組み、さらに鉄条網を張りめぐらし、頂上に銃座を構えている。散兵壕は二呎もある深いもので、それらは交通壕で結び、後方から弾薬をどんどん補給している。武漢三鎮を防衛するにふさわしい堅陣だった。郷土の将兵はこの西山攻略をめぐって以後半月余にわたって死闘を展開したのであった。

双眼鏡で敵情を偵察する幹部も、こんどは一朝一夕にはいかないぞ、と緊張する。わが方の戦力は相当低下しており、すでに不利な状況だ。一方敵は正規軍の精鋭をあとから増強してくる。大別山の戦闘に従事した将兵たちに「この戦闘は事実上わが軍の敗戦だった」とさえもらせているほどの苦闘だった。攻撃開始前の不気味な静けさの中で将兵は故郷へ最後のたよりを書き、ある者は形見の品を従軍記者



に託したりして戦死を決意したのであった。

二日。この日山田連隊長は本部に第一大隊長、歩兵砲中隊長、第三大隊副官を集め、旅団長から示された師団及び旅団の今後の攻撃計画を伝え、「敵陣突破の目標は五日だ」と直ちに準備を命じた。

師団の作戦は、師団の一部で敵をケン制し、主力は麻城街道西方に重点をおきながら小馬沖東西の敵を攻略する。旅団は歩兵隊となり、小馬黄沖両側及び磨盤山西南側の敵陣を突破することになった。

生イモ食べ雨水飲む

——総攻撃前日しばしの休息——

## 西山高地攻略

旅団命令により姉妹部隊の奈良三十八連隊が右第一線となり、小馬黄沖西側高地に対して攻撃すべく、わが第三大隊と一線を交代、戦闘態勢にはいった。

一方、第三十三連隊は旅団命により、十月二日午後六時十分、歩兵隊左第一線となった。このため、それまで右第一線だった第三大隊は三日午後七時半、奈良連隊と交代して麻城街道以東地区に移動、翌四日正午配置を終えた。左第一線だった第一大隊はそのまま磨盤山最高峰以東の線で戦闘配置につき、二日夜からひそかに進撃準備を終えた。連隊に配属の野砲第二十連隊第二大隊（二中隊欠）も麻城街道沿いのくぼ地に陣地をしき、十二門の砲口を西山向けてそろえ待機する。迫撃砲中隊は本道東側、第二望楼付近の敵陣をにらむ。工兵小隊は連絡路の修理にかけずり回る。通信班も活躍する。総攻撃準備が着々進む中、

この日も松葉上等兵以下四人が戦死、長谷上等兵以下二人が負傷した。三日も攻撃準備、前川上等兵以下戦死二、負傷森口上等兵以下四人。

四日、敵の動きはますます活発となる。午前四時、磨盤山最高峰に数十人の敵はひそかにほく前進で接近、手投げ弾を浴びせてきた。警備中の第二中隊は応戦し、三十分後に撃退、正午第十中隊と守備を交代した。

一方第五中隊（村岡恒蔵中尉）機関銃一個小隊が警備中の楊家寨方面でも、午前三時ごろから迫撃砲に援護された五、六十人の敵に夜襲された。応戦後約三時間で撃退した。（詳細は次項）

こうした状況のもと、師団は攻撃開始を一日延ばし、六日と決めた。理由は①戦線の交代により、指揮官はさらに前面の敵情地形を偵察する必要がある②重砲が六日に到着の予定③将兵の疲労回復をはかり、一気に敵陣を突破する、というものであった。連隊はこの日も兵一人の犠牲（戦死）を出した。翌五日、野砲兵大隊長と連隊長の間で、明六日



一〇三高地奪取後の光景

の攻撃についての協定があった程度で戦死傷もなく過ぎた。

第一線の将兵は、総攻撃を目前にして銳気を養った。といっても敵前のザンゴウである。食糧の補給はとだえたままだから、現地徴発だ。それも米はほとんどない。山腹の畑からイモを掘ってナマでかじる。時おり交代で敵と反対側の山すそにおいて飯ごうでいもをたいて食った。水は谷あいのドロ水を澄まして飲んだ。天幕にたまった雨水もうまい。軍服は徐州戦以来の着のままで、もちろん夏服だ。雨とドロにまみれたまま洗うひまなどない。秋の雨にぐっしょり濡れ、昼間でもハダ寒いほどだ。敵前だから、火をたいて暖をとることなど許されない。夜は薄い毛布にくるまって“山腹のねぐら”にもぐり込む。そのうえマリアが将兵を悩ませた。ほとんどの将兵がやられた。天幕にくるまったりして予防にとめたが、それでも患者は続出、四十度を越える発熱と悪寒に襲われた。しかし、将兵の結束はかえって固くなっている。一本のタバコも分け合っている。欲も得もない。あるものは信頼だけである。“第一線の将兵の姿は神様みたいだ”と従軍した人々は回想している。

こうして、明けて六日から西山高地への攻撃が開始されたが、従軍記者たちは「イモ腹の将兵のどこにあんな元氣や闘志がひそんでいたのだろう。したを巻いたほどだ」と評している。

## 2日前に突然敵兵

—— 広千吉さん九死に一生、濃霧にまぎれ潜入 ——

### 西山高地攻略

十月四日、楊家寨（ようかさい）の守備中、逆襲をかけてきた敵兵と一騎討ちした第五中隊第一小隊で  
き弾筒班、一等兵、広千吉さん（六九）Ⅱ伊勢市二俣町一丁目九—三九Ⅱの思い出話をひとつ。

その日も大別山脈は霧が深かった。歩哨の  
番に当たった広一等兵は小隊の陣地から約  
五、六㍎の地点に腰に銃を構えて立った。楊  
家寨は磨盤山の東方約二㍎にある。付近では  
最も高い山、右に五九二・三高地（清水山）  
鉢巻山、西山高地が霧に包まれている。遠く、  
あるいは近く日中兩軍の銃声がこだましてい  
るが、広一等兵の立つ付近は気のせいか静か  
過ぎた。霧の流れる音さえ聞こえそうだ。も  
う幾日も銀しゃりにありついていない。その  
うえ、とにかく疲れ切っていた。戦争がなか



軍服姿の広千吉さん（向かって左から二番目）

ったら、あと十日ほどで故郷は大祭り（お伊勢大祭）だろうに……そんなことをぼんやり考えていたのだろうか。突然目の前の霧が晴れあがった。

「……」思わず息がつまった。全身の血がかつとのぼり、眼球に渦を巻いた。目と鼻の先、約二肘の地点に敵兵がひとり、銃口をびったりと広一等兵の胸板にねらいをつけて立っていた。一瞬「おれは夢を見ているのではないか」とさえ思った。敵兵は同じ年ごろ、二十二、三歳だろうか。さすがに目が血走っている。こちらの銃は安全装置をかけたまままだ。

応戦するより早く、敵兵の銃口が火を吐くだろう。銃を握った広一等兵の指先がピクピクッとけいれんする。広一等兵は相手の銃口より引き金にかかった指先を凝視した。用心てつを引きしぼる指先の動きを読みながら、次の行動を判断する。双方とも息づまる瞬間だった。

敵は引き金をしぼった。

ダンッ！

どう避けたかわからない。ともかく敵弾ははずれた。これで敵兵もあわてた。持っていた手投げ弾数発を味方陣地にたたきつけ背をみせた。広一等兵は自分の動きがもどかしかった。あせるだけで、銃の安全装置がうまくはずれない。それでもやっと発射した。銃弾は虚空に消えて行った、敵兵は十数肘のガケ下へころがって逃げて行く。持っていたてき弾筒のりゅう弾を二、三発投げおろしたが当たらなかった。この間、わずかに一、二分のできごとである。

「あの瞬間はいまでも思いかえすとカッカッときます。楊家寨高地は、山頂近くに城塞（約二肘の石垣）

があり、敵は霧にまぎれて登ってきたらしい。このあと迫撃砲弾の雨を浴び、小隊長代理の分隊長はじめ相当数が戦傷死、無キズで山をおりた兵はたった三人でした。わたしもマラリアにやられ、野戦病院に入院しました」

当時の中隊長は同じ伊勢市浦口町出身の奥野安次少尉（昭和十九年十月七日、ビルマ・レイテ百五兵站病院で戦傷死、三十三歳、大尉功五級、第一五一連隊第三大隊第十一中隊。同町三一二に実弟の正五さんがいる）戦友は松阪市射和、竹川文五郎さんら。

広さんは現役で出征、十八年召集され、教育要員で久居の第三十三連隊にいたが、新しく編成された八丈島警備隊（北川中尉）に編入され、同地で終戦を迎えた。弟の藤内さんも沖繩に行ったが、無事帰った。

○

○

○

楊家寨は三浦大隊がほとんど無血で占領、はじめは大隊全部がとりついていたが、敵が後方かく乱をはじめ、旅団司令部があぶなくなったため三浦大隊長以下主力が急行、第五中隊と機関銃中隊（島田勝巳大尉）の半分が守備に残っていた。高地上に陣地をつくって歩哨を立て、主力は山すそで飯ごう炊さんをしてた。このときのできごとである。敵主力は同高地左翼方面に集中したため、同高地への逆襲は散発的だった。（機関銃中隊長だった島田勝巳さんの話）

## 軍刀振りかざし突入

——正亀少尉占領後、逆襲に遭い戦死——

### 西山高地攻略

九月二十八日以来、磨盤山の最高峰を中心に東西へつらなる第一線へ進出、着々攻撃準備を進めていた連隊は五日、夜陰に乗じてひそかに攻撃部署についた。

前面の地形はけわしく、それに各中隊とも戦闘員はわずか四、五十人におちている。マラリアにかかる者も多く、第三中隊長はじめ小隊長はマラリアのため休養、下士官が指揮をとるありさまで、強敵の前に苦戦が予想された。

明けて十月六日。敵に感づかれないよう陣地を構築していた協力の野砲兵第二大隊（4、5、10）及び配属山砲兵中隊が夜明けとともに試射を開始した。ズオン、と大別山脈をゆるがす。

午前九時、砲兵の試射が終わったのをみた山田連隊長は、すぐに第一線に攻撃前進を命じた。速射砲を配属され、発煙一小隊と工兵半小隊の協力を受けた右第一線の第三大隊は、同四十分、まず第二望楼北方の鉢巻山に攻撃を開始した。敵は山腹の要所に銃座を配置、交通壕で結び、さらに要点の前方には障害物を設け、必死に抵抗してきた。大隊の右第一線となった第九中隊（太田雄三中尉）Ⅱ左は第十中隊、第十一、第十二は予備Ⅱは配属の機関銃一個小隊はじめ迫撃砲、速射砲など重火器の制圧射撃のもと前進、手投げ弾を浴びながら突入、同十一時二十分占領した。

左第一線の第一大隊は機関銃一個小隊配属の第四中隊を中第一線に楊家寨前方の風波栗高地を攻撃した。山砲、歩兵砲、軽りゅう弾砲はじめ配属の第五中隊と第二機関銃一個小隊が楊家寨から第一線の前進を援護する。午前五時ごろ行動を起こした将兵はラクダ山の東をウ回して谷を渡り、山を越えて七時には敵前五百呎の地点まで進出、砲兵の制圧射撃終了と同時に正亀勤少尉（伊勢市出身、実父は神宮権称宜だった）の第一小隊、佐波順次郎准尉（松阪市大黒田）の第二小隊は、第一、第二の敵陣を突破、第三陣地前五十呎に迫った。正亀少尉は、



正亀勤少尉

「突っ込めッ」

と号令し、軍刀を振りかざして敵陣へ突入、部下も大喚声と共におり込み、十一時四十分占領した。占領と同時に、敵は後方陣地から迫撃砲弾の集中火を浴びせ、逆襲に出てきた。将兵は壕へころがり込んだが、正亀少尉は迫撃砲弾の破片を全身に受けて戦死、また第四陣地と対していた第二小隊でも、突撃路を双眼鏡で偵察していた佐波准尉がこれも迫撃砲弾で右足を負傷した。こうした多数の死傷者を出し

ながらも、占領陣地を守りきった。

第一大隊方面の李家凹西北方高地は南方に長くつらなっており、これを抜くにはかなりの日数がかかる。こう判断した渡辺一大隊長は午後一時十分、

「風波栗高地を確保し、磨盤山最高峰を攻撃すれば、敵から側射される恐れはなくなる」



と報告、このため連隊長は第三大隊に「西方に戦果を拡張すべし」と命じた。さらに七日午前一時四十分、磨盤山東北山ろくの一軒家に本部を置く連隊長は作戦命令甲第三八二号を下し①連隊は磨盤山西側及び南側に攻撃を続行し、吊橋湾東側に進出する②第一線両大隊は前任務を続行、とくに左大隊はまず磨盤山南側高地を奪取せよ。右大隊はこれに協力、また砲兵隊は主力をもって大円山を攻撃、一部で磨盤山南側攻略に協力すべし——と命じた。

なお、六日の戦闘で正亀少尉以下九人の戦死、佐波准尉以下十五人の負傷を出し、連隊の戦闘力はさらに低下した。

この日、姉妹部隊の第三十八連隊も北部岩山を占領、南方高地へ戦果を拡大していた。

## 5 中隊から12中隊へ

——垣見さん 変更され命助かる——

## 大別山の苦闘

第三十三連隊が徐州、大別山の死闘で多数の戦死者をだしたため欠員の補充で戦場にかけてた垣見浅一さん（六七）Ⅱ鈴鹿市石薬師町鞠ヶ野Ⅱは古い戦場の写真や手紙を取りだし、当時を思いだして声をつまらせながら戦争と戦場のもようを語って下さった。

昭和十三年八月、大阪の第三突堤から乗船して上海に上がり、三日ばかり上海に泊まって南京へ向かった。南京から汽車で蕪湖まで行き、船で裕溪口に渡り、廬州、蚌埠を経て徐州までは汽車だった。汽車は



今の垣見浅一さん

有蓋車だったが、すわったまま身動きできないままだった。それはよいとしても、動きだしたと思うとまた止まる、止まったかと思うとまた動く、駅でないのに一晩中とまっている。ここで敵の襲撃でも受けたら全滅ではないかと、心細さは限らないものであった。

徐州から第三十三連隊が進撃した後を追って歩いた。毎日毎日歩きどおしだ。前戦では死闘が繰り返されているのだ、指揮官も早く早くとシッターする。前線へ前線へと心がはやる。足は、マメの上にもまたマメが出来る。昼夜兼行の行軍は歩いていて眠るときいたが、そのとおりであった。完全武装で鉄砲がついで歩きとおし、前を行く兵にぶつかって目がさめることがたびたびだった。

六安付近を過ぎ、西橋頭、葉家集にきたとき大休止があった。その頃になると前線へ追及する部隊と後送される負傷隊とで広くない商城への通路は幅をうする。日本軍がどこにこんなにしたのかと、戦場での友軍は心強い限りである。

淮河の支流、史河のほとりで一、二日前からきていた兄貴たちの部隊と一緒にになった。なつかしかった。戦場で、しかも偶然、まさかあのようなところで会えるなんて思っていなかった。

それからまた第三十三連隊を急追及、小さい体だったから「チンマン大尉」といつていた大尉が輸送指揮官で商城へ向かった。もうここは前線で戦場のにおいがブンブンしてきたが、実際の戦場に立ったときは、そんなものではない。激戦、激烈、悲惨、「苦闘」というものは人間技ではないのですね。人間はどこまで耐えうるか、戦場での無限大の威力と底力にはわれながら驚いたものです」と垣見さんは力説する。

音に聞こえた峻険な大別山の偉容を前にして、私たちが追及している第三十三連隊は前戦に深く突入しているのです、まず福知山の第二十連隊の指揮下に入った。後方だったので二、三日警備をしていたが、間もなく第三十三連隊要員集合命令が来たので山の中へ進発した。

どこであつたかわからないが、ちょっとした広場があり、天幕が一つ二つあつた。ここが連隊本部だという。各大隊ごとに配属先が決まり、私は第二大隊の第五中隊と決まって並んでいたら同郷の北川幸雄さんが長い剣をつっている。

「おい垣見君じゃないか」

こんなとき軍曹である上官から言葉をかけてもらうだけでもうれしいのに、

「あんた何中隊だ」

「五中隊です」

「私は十二中隊だから私の中隊へ来なさい。私が本部へ行つて変更してくる」

ということになった。

ありがとうございます、お願いしますと頭を下げたのが運命の分かれ道で、「今日の私が元気でこうして

いられるのも北川幸雄さんのおかげです。北川さんは命の恩人です」

垣見さんはしきりに感謝していた。第五中隊はその後中隊長以下十三名になってしまったという。

戦場に立つ戦友愛、これはいかなるものも乗り越えて得られる真実のものであり、比べることのできない強固なものである。垣見さんは昭和十二年の初年兵だったが、中隊に配属されると同時に突撃だった。右も左もわからぬまま、ただ敵に向かって突進する。岩をよじ登り、岩石にかくれつつ進み、突撃線上に出たときカン声をあげて敵中へ突っ込む、内地で教えられた通りの突撃である。分隊のものもみんなが一緒に突撃した。古年兵から頭が高いとぶんなぐられる。

「お前そんな姿勢をしていたら、あしたはおだぶつだぞ」

真に迫るものがある、これが戦場だ。小銃弾ぐらいいは気にならないが迫撃砲は気持ちの悪いものだ。

古兵がこの弾は近いぞ、この弾は遠いから大丈夫と教えてくれる。

私たち第十二中隊の沼田伍長が指揮する軽機分隊だから斥候に出されたが、深く突入しすぎたのか後を向いたら敵だらけだ。

(どうしよう)

騒ぐといけないからじっと身を寄せ合った。射ってはダメだといわれる。あの時はもう全滅かと覚悟した。何時間か身動き一つせず固まっていたが、中隊の攻撃目標は決まっているから、朝になったら本隊が動き出すだろう。そのとき本隊へもどうと分隊長が言うので、そのままじっと朝のくるのを待った。何時間か過ぎたころ、敵が退却しはじめた。

## 夜間に敵情を視察

——初年兵の垣見さん立派に目的果たす——

垣見さんたちはようやくにして死地を脱して中隊へ帰った。帰ったといっても幕舎ではなくて携帯天幕を頭からかぶっている集団だが、うれしかった。

「中隊は総員で貴様らの搜索に出ようとしていたところだ」

と中隊長以下、垣見さんたちの無事帰還をよろこんで迎えた。分隊長の敵情地形の報告が終わり、いよいよ今夜はわが中隊は夜襲突撃をするという。中隊長の村岡中尉がマラリアの発熱で戦闘指揮が出来ないというので後方へ下がった。そのあとは、鈴鹿市神戸堅町の坂倉健一少尉が中隊長代理として第十二中隊の指揮をとった。

薄暮より攻撃、野砲の援護射撃の射程遠延の間隙を利用して前進するのだが、攻撃前進したあとにドカン、ドカンと砲弾が落ちてくる。ここでも生きた心地がなかった。

「砲兵ノなにをしている」

坂倉中隊長はカンカンに怒って抗議したが、数分でおさまった。その攻撃目標は鉢巻山だったと思うが、あのかきは一文字山とか磨盤山とかはまさに死闘の繰り返しで、夜襲と突撃で占領したところを翌朝また奪取されることがしばしばあった。日露戦争の二〇三高地の争奪戦さながらの苦闘であった。鉢巻山の悲壮な攻撃もまた言語に絶するものがある。



そのときの大隊本部

こうした激烈極まる死闘を繰り返している中で、初年兵で、しかも夜間に二、三日戦闘しただけの私に、坂倉中隊長代理が、あの方向の敵情視察斥候に行けと命令された。同年兵の一等兵と二人である。

「こわかったですな」

ふるえ上がったが仕方ない。暗夜の岩石だらけの山中である。それでも立派に目的を果たして報告が出来た。突撃前進する地形と敵情を知ることである。

こうした中で任務を果たした喜びはまた格別である。中隊全員の期待を双肩に荷うというのはこのようなときの言葉であろう。

こうして前進、最後はわが第十二中隊の突撃で鉢巻山を占領した。そこまでは上々の出来栄だったが、占領した鉢巻山に警戒線をしき、抵抗戦についたところ、なにほどの時間も経たないうちに敵が逆襲してきた。

「あの時はあわを食ったね。なんにもかも無茶苦茶で、撃って撃って撃ちまくった。ほんとに怖かった」

あくる朝になって見たら敵が折り重なって死んでいた。まだ動いているものもあった。まだ弾はビュン、ビュンと飛んでくる。坂倉少尉が稜線にでて眼鏡で敵情偵察を試みたたん額面に一撃、有無なく即死だった。

同じ分隊の大藪という古兵の口にも弾が当たって、ものがいえなくなってしまった。急いで山のかげに大藪を運んで世話をしたが、ものが言えないから小便をしたいというのも暗黙のうちに了解してやらねばならない。気の毒だったが、出血多量で翌日戦死した。

やっとのことで鉢巻山付近を掃討して山を占領、坂倉少尉と大藪の遺体をダビに付した。そのときの中隊長代理は大原曹長であった。

「鉢巻山は占領しました。仇は討ちました」

ダビの火に涙の頬を照らしながら、坂倉少尉、大藪に報告したものであった。そのころになると敵は算を乱して逃げて行く。

「なにをもたもたしているのだ、あの敵を討て、討たんか」

と、シッタ激励するのは山田連隊長である。連隊長が第一線にきておられるのである。中隊や兵がもたもたしていられないのはあたりまえだ。しかしそのとき山田連隊長は流れ弾に当たって負傷。

翌朝、長谷川という人と二人で飯ごうすいさんに山を下りて行くとき、邪魔になるので銃を置いて行った。敵がいるのではないかと気を配っていたが、案の定モソモソと動いてくる。あわてて銃を取りに帰り、おっとり刀でそれを撃ち殺した。

そんなことから熱が出たのか、マラリアにかかり、毎日四十度以上の熱が出てどうにもならなくなり、魔の大別山は突破出来たから、これからは大した戦闘もないだろう、無理して本隊と共に漢口に入城したいと願ったがどうにも体の自由がきかなくなった。やむなく後送され、南京で回復して再び漢口の奥にある孝感に駐留していた本隊を追及した。

「私たちの分隊で金鶏勲章を賜ったのは沼田分隊長、射手の種田と柴田、それに長谷川という弾薬手、渥美という上等兵……一つの分隊でこんなに金鶏勲章をいただいた分隊はほかにないと思います。だから私も勤務していた期間は短かったが上等兵にいただきました。早過ぎるくらいです」と、垣見さんは語っている。

### 17人戦死、36人が負傷

——息つく間もなく攻撃前進——

### 西山高地攻略

あくる十月七日、午前七時三十分、山田連隊長は予備隊を率いて磨盤山最高峰に登った。霧が深く敵陣地はその中に包まれている。味方の動きさえもつかめないほどだ。やっと九時ごろになって晴れ上がり、待ち構えていた砲兵が制圧射撃の火ぶたを切った。連隊長は前日同様、重点を左翼に置いて攻撃続行を命じた。

左第一線の右第一線となった第二、第三中隊（前日は予備）は、磨盤山南方高地の東山ろくから攻撃前



進を開始した。前日来、マラリアの高熱で休んでいた第三中隊長の尾崎金之助中尉は、きょうは病をおして指揮をとっている。中隊の戦闘員はわずかに四、五十人に減っているが、中隊長の姿を見て「きょうこそは」と士気が上がった。

前方二百呎の高地にこもる敵はその稜線のざん壕を補強して陣地を固めている。重火器の制圧射撃のもと前進した第一線も、敵陣の前が絶壁のように切り立っているため一気につつまめない。それに地形の關係で制圧射撃も的確に敵陣をたたくことができなかった。集中砲火の間、鳴りをひそめていた敵は第一線部隊がガケをよじのぼり始めるとざん壕から姿を現わし、乗り出すようにして得意の手投げ弾の雨を降らせてきた。しばらくは身動きもできない。そこで松岡久郎中尉指揮の発煙中隊が特殊煙を発火する。さすがに将兵は突進、午後十時四十分第一線陣地を占領した。

息つく間もなく第二線陣地へ肉薄する。午後五時半、砲兵隊主力、迫撃砲は再び突撃支援の砲撃を開始した。敵陣に近づくにつれ、高地の斜面はいよいよわけなくなる。砲兵の弾幕だけでは突つまめない。再度特殊煙を使うことになり、松岡中尉は先頭に立って部下を督励、猛火の中で特殊煙による敵の制圧につとめた。しかし風向きが悪く効果がでない。そのうち夕やみが迫ってきた。第三中隊は薄暮を利用して突撃を敢行、手投げ弾戦で同六時占領した。松岡中尉は敵手投げ弾の破片を浴びて戦死、尾崎中尉も負傷した。また第二中隊長代理の川村可夫少尉（一志郡嬉野町宮古）も負傷した。

将兵のいやがる夜が訪れた。同七時、山砲兵の援護に出ていた第一中隊が復帰、第三中隊長の指揮下にはいった。同七時半、敵は薄暮と濃霧に乗じて三方から、第三中隊の正面に逆襲をかけてきた。敵は手投

げ弾をバラバラ投げつけてはしつこく何度もなぐり込んでくる。第三中隊の戦闘能力は昼間の戦闘で戦死傷を出しており、わずか三十余人、しかも疲れ切っている。しかし落ちついて応戦、撃退した。この状況を見た連隊長は予備の第七中隊（六十余人に過ぎず、二小隊編成）から一個小隊を出そうとしたが、渡辺大隊長は「軍旗守護の方が大事です」と断った。この方面は予定線まで進出していたので、連隊長は陣地の確保と次の攻撃準備をさせた。

一方、右第一線の第三大隊方面も協力、野砲、迫撃砲の援護のもと攻撃前進、正午ごろ第十中隊は磨盤山最高峰の南方「西山」の一字山付近に進出した。敵は要所にえんがい銃座を配し、深さ一・五呎の散兵壕に陣してがん強に抵抗した。日ごとに戦力の落ちている連隊には一気にこの敵を破る力はなく、一拠点を奪取しても次の攻撃態勢を整えるのに時間がかかった。上田第三大隊長は午後五時半を期して再び南方高地攻撃を命じた。

このころ第三十八連隊方面を援護していた砲兵隊主力は、同方面が濃霧に閉ざされたため、わが連隊を援護すると連絡してきた。砲兵は南方高地最高峰、鉢巻山、一字山一带に猛烈な突撃支援射撃を開始し



恨み重なる西山高地（砲兵と発煙中隊の援護で）

た。(先の第三中隊が援護されたものとき)第十中隊は砲撃開始の前、すでに敵陣前の鉄条網まで接近していたが、敵の陣地はさながら保塁のように強固で同八時までかかってやっと前面の敵を陣地内に追い込んだにすぎなかった。

この日の戦闘で松岡中尉以下十七人の戦死、尾崎中尉以下三十六人の負傷という大きな損害を受けた。給水班、衛生隊の進出が遅れているため、連隊長は師団参謀長に「後方部隊の活動、第一線に追随せざるは遺憾、奮起を望む」と連絡した。なおこの日の夕方、奈良第三十八連隊は松山とトンガリ山を占領した。

### 濃霧利用し前進開始

——第一中隊、第三線陣地奪う——

### 西山高地攻略

十月八日、きょうもまた濃霧、五ヶ先は見えず、この気象状態では砲兵の射撃は不可能だ。しかし山田連隊長は、連隊独力で攻撃を続行することを決意、第一、第三兩大隊長に次のよう命じて将兵を励ました。「濃霧深く山をおおい、通視わずかに五十呎を出ざるをもってよく敵眼をしゃへいす。濃霧は郷土皇太神宮の下したまえる神霧なり。各隊は極力この天祐を利用し、戦果の拡張に努めるべし」と。

連隊本部は磨盤山北側のふもとに置いていた。草ぶきの、くずれかかった一軒家、家が小さいので軒下まで兵隊がはみ出していた。山田連隊長は従軍記者をとらえては「おれは大別山でたくさんの部下を殺した。部下の留守宅ではおれを、この山田をうらんでいるだろうなあ。戦死してくれた部下は各家庭にとっ

ては大切な息子であり、また一家の大黒柱であろう。中には妻子のあるものもあろう。おれは部下の留守宅のこと、遺族のことを思うと苦痛でならない。部隊長は比較的安全な所にいて、生き残っているだろうと思われているかも知れないが、おれは一軍を率いて戦って行かなければならない重い責任がある。おれはいつでも敵陣におどり込んで死ぬ覚悟をもっている。いな、おれは兵隊とともに敵陣に飛び込んで戦死したいくらいだ。そして、殺した部下のご遺族におわびしたいと思っているが、いまは絶対に死ぬことは出来ない。最後の一兵までも戦って大別山をぬき、漢口への血路を開かなければならない」(当時の坪井淳美特派員記「大別山従軍記」)と声をふるわせて語っていたものだ。

この朝の督励にも、こうした悲痛な心境、悲壮な決意があふれている。鬼の山田か、ホトケの三浦(第二大隊長)か」と将兵からけむたがられるほど厳格な山田連隊長だったが、心の底ではだれよりも強く部下の健勝を祈っていたのだ。

左第一線の第一大隊は、濃霧を利用して第一中隊を第三中隊の右に増加、南方高地向け攻撃前進を開始した。十一時半ごろから霧は晴れ上がったが、第一中隊は死角をたどって敵陣に接近、一気に突っ込んで午後一時四十分、第三線陣地を奪った。

右第一線の第三大隊も濃霧について攻撃前進を始めた。上田大隊長は、磨盤山頂上の岩角から双眼鏡で敵陣をにらんでいる。左第一線の第十中隊は西方から側射され、前進がにぶっている。上田隊長は、すぐに第十一中隊の一小隊(野々正巳中尉)を、第十中隊の右に増加した。それでも進展を見せない。敵の抵抗はがん強だ。



散兵壕の前に鉄条網が倒されている、敵陣迫る我第三十三連隊勇士の姿が明瞭に写っている貴重な写真である。  
惨烈苦闘の大別山、着剣されたままの三八式歩兵銃の持主は……。



この砲弾痕、大別山激戦の跡

「午後五時三十分を期し、全線一斉に突撃せよ」

と命じ、砲兵の援護を要請した。同六時、砲兵の制圧射撃のもと、薄暮に乗じて肉薄、敵は死にもの狂いに抵抗したが、同九時、右第一線の第九中隊は第二望楼北側陣地を奪取、同時刻ごろ第十中隊も一文字山の前面陣地まで迫った。

第三大隊の左方面は、小林準一少尉（一志郡美杉村上多気出身）が中隊長代理として第十中隊を率い左翼第一線、野々小隊が右翼第一線で突入した。小林少尉は中隊の先頭に立って突進、中隊の攻撃拠点を占領したが、鉄条網にはばまれ、たたく間に多くの負傷者を出し、無念の涙をのんで山を下った。この日も連隊は、小林少尉以下三人の戦死を出し、また戦傷も宮本正三少尉以下二十八人を数えた。

連隊苦戦の状況をみた旅団長は、この日山田連隊長に対し「貴隊の方面は、地形上戦果の拡張がはなはだ困難だから無理をせず、自重して現在線を確保し、機を見て前方に地歩を獲得せよ」と連絡してきた。

午後七時三十分、連隊長は「各隊とも現態勢のまま夜を徹

せよ。戦力の損耗を避けるため陣地を固めよ」と命じた。また連隊長が前日「はっぱ」をかけたため、やっと師団給水班が第一線に進出、山上に水を運んできた。泥水や雨水に頼ってきた将兵は久しぶりに清水でのどをうるおしたのであった。

### 工兵隊が鉄条網破壊

——別所上等兵ら突撃開始——

### 西山高地攻略

久居市新町二一四五、別所常雄さん（六七） 〓元久居市助役〓は上等兵で第十一中隊。十月九日の戦闘で右胸に破片創を負った。

磨盤山占領後の二、三日間、第十一中隊は予備隊で休養をとっていた。そして八日朝、西山高地のうち一文字山陣地に対し、まず第十中隊に攻撃命令が下がった（前項参照）文字通り、稜線が「一文字」を引いたかっこうの高地、頂上には丸太を打ち込んで鉄条網を張りめぐらし、えんがい機銃座を要所要所に配置、さらに陣地の五、六十呎前方には深さ一、二呎もある散兵壕で固めている。第十中隊は、正午近くには敵前百呎の点まで進出したが、このころ濃霧はまったく晴れ上がり、第十中隊はやむなく伏せたままの姿勢でエンピを使ってタコツボ壕を掘り、身をかくした。不用意に頭をあげようものなら、

ピューンッ

たちまち狙撃される。将兵は壕の中で身を縮め、突撃の機を待つよりしかたなかった。

この状況を見て、上田大隊長は予備の第十一中隊に出勤を命じた。中隊長代理、野々正巳中尉（員弁郡藤原町大貝戸）は一個小隊を率い、磨盤山の右すその谷間をウ回、前進した。途中廃屋同様の民家が二戸あり、ナツメの木がボツンと立っていたのが印象深い。正午ごろには、さきに第十中隊が奪取した敵のざん壕付近まで進出した。しかしそこから前への攻撃はむずかしい。敵はがん強な抵抗戦をしているからだ。第十一中隊の将兵はやむなくだから斜面にくぼ地を見つけては身をかくし、敵に背中を向けたかっこうで待機した。この情景が、ちょうど正面にあたる磨盤山上の上田大隊長の双眼鏡に映ったからたいへんだ。中隊の伝令軍曹が飛んできた。「敵に背を向けるとはなにごとだ、と大隊長殿がカンカンです。直ちに突撃せよとの命令です」野口中尉は「夜にはいらないと攻撃は無理だ、と大隊長に伝えてくれ」と突っぱね、第十中隊の占領した敵前五、六十人の散兵壕にひそみ、待機した。日没が近づき、大別山脈にはまた小雨が降り出した。六時半頃、砲兵の制圧射撃に呼応してまず十中隊が突撃、小



大別山攻撃に立ちのぼる砲煙



林少尉が戦死、代って指揮をとっていた加藤准尉も「シナ兵にやられてたまるか！」と軍刀を振りかざし、「前進ッ、前進ッ」と部下を励ましながら、突っ込んだが手投げ弾を浴びのけぞった。続く兵もバタバタ倒れる。

攻撃はとん座した。工兵隊破壊班に鉄条網破壊を要請、歩兵はひとまず攻撃を中断した。数時間たった。真夜中だ。工兵隊の鉄条網破壊が成功した。

「直ちに敵陣を奪取せよ」

伝令が大隊長命を伝えてきた。右の第九中隊方面も夜間攻撃をくりかえしている。時計を見ると午前二時、（九日）野々中尉が「前進！」と命じた。別所上等兵ら隊員は防毒マスクをつけ、壕からはい出した。工兵隊あるいは発煙中隊が特殊煙をはなったからだ。待機中は軽機を持たされていたが、突撃開始と同時に古参兵に取り上げられてしまい、小銃を握った。付け剣のため腰の銃剣を抜いたが連日の雨で赤いサビが吹いている。「赤サビの剣で戦死するのは恥だ」と壕の盛り土に突き刺してはサビを落とし、布切れでドロをぬぐって銃にしっかりと装てんした。

第三分隊長の青木正伍長（津市豊里）に「別所こいよ」とうながされ、「はッ」と伍長の左にくつつき、じりじりっと前進を始める。たちまちあたりに敵の手投げ弾がサク裂、一瞬真昼のように照らし出される。またもその場にクギづけされる。かれこれ午前五時ごろだろう。

# 敵手投げ弾サク裂

——三国一等兵ら戦死、別所上等兵も重傷——

## 西山高地攻略

第十一中隊は、岩かげやくぼ地にへばりついたまま一步も前進出来ない。別所常雄上等兵と並んでいた青木正伍長は、手さぐりでくぼ地を探すと「別所伏せろよ」と声をかけ「止まれッ」と分隊員を手で制した。しばらく経って敵の手投げ弾がやや下火になると、

「行くぞ」

と手の合い図を送り、「別所、おれに続け」とからだをあげた。その瞬間だ。目の前で手投げ弾がサク裂、ヤミをさく火花の中に青木伍長ののけぞる姿が映った。破片を浴び即死した。

「分隊長殿が！」と叫んで引きずり降ろす部下、三国誠一郎一等兵（南牟婁郡）村木芳郎上等兵（一志郡）秦正一上等兵らも朱に染まって戦死する。

別所上等兵も背中にもハンマーをたたきつけられたような衝撃を受け、ひざを折った。口の中がいやに生あたたかく、全身の血がずっと引いていく感じ、ナラクの底に落ちていくとはこのことだろうか。えも言われぬ気持ちを感じ、気絶した。手投げ弾の破片で右胸の肉をタテ二十二疋、横九疋にわたってえぐり取られ、そのショックで肺内出血を起こした。時に午前四時半、中隊は頂上へ突進し、鉄条網を破壊したものの、どうしても敵陣の一角をおとし入れることが出来ず、歯がみしながら引き下がった。東の空

がしらむころ、疲れ切った将兵は、監視兵だけを交代で出し、壕の中で死んだように仮眠し、次の夜の攻撃に備えた。

沙窩の野戦病院に下げられた別所上等兵は死線をさまよっていた。セキが出る。そのたびに肺はひきつるように痛み、血のかたまりを吐いた。翌日、トラックで商城に送られたが、このころから傷口が化のう、ウミが肩をぬらし、ウジがわいた。包帯の交換は一度もない。衛生兵が「破片創ってやつは傷口がジグザグになっているからいっぺんウジ虫に食わせろ」といったコトバはいまでも覚えてゐる。食糧の補給も途絶えたまま、食う物もない。（内地は久居祭りだらうに！）ぼんやりと故郷を思い、俳句を詠んで慰めた。年末になって内地まで後送され、まる一ヵ年治療を受けた。十六年十月再び召集され、第三十三連隊でマニラに上陸、十八年に召集解除となったが、戦局悪化で二十年三月、三たび召集され、輸送係伍長で中国へ、その後舞鶴軍港西の木津峰山に移り、海岸線に山砲の陣地構築中終戦となった。

○ ○ ○

一方、小林少尉を失った第十中隊は、部隊の名譽にかけても一文字高地を奪取しようと決し、まず前進を阻む頂上の鉄条網を爆破することになり、決死隊は五人と決まった。「自分をやって下さい」「いや、おれが行くのだ」と先を争って名乗り出る兵。「行けッ」と命じることが死を宣告するにひとしい。

隊長は厳しい軍律と人情の板ばさみにたえ、小山堅司伍長、田中一弥上等兵、松本悟二一等兵、松本武一等兵、浜口孝二一等兵の五人に決定し、「ご苦労だが任務を果たしてくれ」と悲痛な声で命じた。

「よろこんで行ってきます」

きっぱりと答えた五人は、重い爆薬を一つずつ背負い、小山伍長の指揮で夜のヤミの中へ消えて行った。そして五分、十分、頂上付近で火柱が突きあがり、すさまじい爆発音がとどろいた。間もなく血だるまとなった小山伍長以下三人がころがるように山をおりてきた。

「鉄条網は爆破しました。しかし残念でした。山を下る途中、手投げ弾にやられました。われわれ三人だけ生還して申しわけありません」浜口、松本悟両一等兵は再び味方の陣地に帰ってこなかった。

午後四時ごろ第三中隊の確保する方面に、敵数百が手投げ弾で逆襲してきたが応戦し、第一中隊方面からもこの敵に側射を浴びせ、全滅に近い損害を与え、撃退した。九日の連隊は戦死青木伍長以下十五人、負傷服部准尉以下三十六人とまた損害を重ねた。

なお、この日、第十三師団が新店付近に進出、西方から西南方へ追撃中、第三十八連隊も岩山に攻撃をかけていた。岩山を奪い、大円山方向へ戦果を拡大しようというのが旅団長の作戦であり、連隊が前任務を続行したのはこの企図に基づくものであった。

### 意識の糸ぶつり

——別所さん死魔に勝ちよみがえる——

### 西山高地攻略

戦場では多くの兵士たちが勇敢に闘い、そして傷ついた。負傷は軽重さまざまだが、不思議に命をとりとめた一人の、別所常雄さん（前項）は、その時のことを「蘇生」と題して次のような文章にまとめている

る。



後送され久居の陸軍病院の別所常雄さん

私は一度死んだ人間だといまだに思いこんでいる。戦場で負傷したとき、たしかに死んだ記憶がある。しかし蘇生したから死んだわけではなく、仮死状態だったわけである。いいかえれば睡眠状態と同じようなものだったといえる。ときは昭和十三年十月八日、私の属する第三十三連隊第十一中隊は大別山脈磨盤山前方約二百呎の西山高地の第一線陣地へ進出を命じられた。西山高地は第十中隊が数日前から前面の敵と激烈な戦闘を繰り返し、将兵の犠牲は目をおおう惨たるものであった。

八日の夜、攻撃をしかけた第十中隊は、第十一中隊の目の前で隊長はじめ兵士多数が戦死傷し、戦う余力は皆無になった。第十一中隊は九日午前二時ごろ、陣地を出て突撃態勢に入り、敵陣の山頂を目ざし、ほふく前進を開始した。着剣した銃を握りしめ、防毒面をかぶったいでたちであった。小ぬか雨がしとしと降っていて天も地も黒一色の闇であった。しばらく前進すると分隊長の青木伍長（当時安芸郡豊里村）

が大声で「別所上等兵はいるか、休憩するぞ」と私を制した。伍長と私は、期せずしてくぼみのように思われる場所に肩をすれ合わせて静止した。数分後青木伍長が「別所行くぞ」と大声をあげた瞬間であった。「ウーン」というにぶいうめき声がしたかと思うと「分隊長がやられた」という戦友の声が上がり、ズルズルと人の体を引きずる音がした。私の正気はそれまでであった。私は大きいハンマーで背すじを一撃されたような強い衝撃を受けた瞬間、息苦しくなり、意識が糸をひくように深い深い闇の奈落へ沈んでいった。

「ああ俺はもう家へ帰れないのか」と、悲痛な最後の意識をその糸にからませながら……。その糸はぶつ切り切れた。それが私の死であった。

数時間、私はこの世の人間ではなかったのだ。かすかに意識がよみがえったとき私は、野戦病院へ収容され、数時間すでに刻が過ぎていたのである。私は死魔の手からぬけだそうと無意識に戦っていたらしい。その様子が読みとれたのであろうか。「おい元気をだせ、いま軍医どのがこの兵隊は今晩もてば助かるって言っているぞ、元気を出すんだ」私はこの激励の声を夢心地で聞いた。付添ってくれた衛生兵の声だった。しかし私はこの声にすぐ元気づく状態ではなかった。自分がどこにどういう状態にいるのか、それを思考する力はなかった。まだ死と生の境地をさまよっていたのである。喉をふさいでいたもの「血塊」が口の中に出ると呼吸がいつべんに楽になった。

そのころから序々に思考力が蘇って、ローソクの灯がぼんやりかすんで見えるようになった。しかし夜が明け切るまでには、一度、二度死魔と無意識にたたかった。苦しい、苦しいたたかいであった。

ふと安らかな眠りから覚めたとき、夜は明けていた。若い生命は強靱であった。私はワラをしきつめた土間に横たわっており、看護の衛生兵の姿がはっきり見えた。

衛生兵「どうだ、少しは楽になったか」

私「はい、眠るととても楽になる」

衛生兵「くずゆをたべるか」

私「はい」

衛生兵がスプーンで口に運んでくれる葛湯は甘くて、とてもうまかった。このひん死の重傷患者はすめられるまま、くず湯のおかわりをし、ビスケットを数個たべたのである。私の恩人であるこの衛生兵は京都出身で妻子があると語り、応召兵の心情を聞かしてくれるのであった。

私はついに死魔との闘いに勝った。

私の「傷病日誌」を見ると「十月九日河南省沙窩付近の戦闘により右胸部手榴弾片創、沙窩野戦病院入院」となっている。そのときの傷はタテ二十二センチ、横九センチでいまなおその傷跡は当時をしのぶ大きなはんこんをとどめている。しかし不思議だったのは、これだけの重傷を受けながら快癒するまで一度も痛みを感じなかったことである。いまでも右胸部のレントゲン写真をとると、小さい弾片が肉の中にかなり散らばっているのがはっきり見えるのだが。

## 果敢に突っ込む将兵

—— バタバタと敵弾のえじき ——

### 西山高地の死闘

十月十日、きょうも雨だ。視界はゼロ。早朝、第三大隊は濃霧を利用し、予備の第十二中隊を左第一線に出し、第十中隊と交代させ、前日の激戦で疲れた同中隊を予備として休養を与えた。第十二中隊の右にはいぜん第十一、第九両中隊が敵陣と相対している。

いずれも敵との距離はわずか百メートル、日支両軍はざんげに身をひそめたままにらみ合っている。壕の上には天幕を張って雨をしのいでいるが、壕の中は足元まで水がついている。雨は午後になって上がったようだが濃霧は相変わらず深い。砲兵も観測が不能で射撃が出来ない。

連隊長は左第一線の第一大隊方面に出て、第一線の状況を視察した。このとき、連隊長のつかんだ兵力は第一中隊二十八人、第二中隊五十人、第三中隊二十六人、第四中隊五十七人（いずれも兵）に過ぎず、しか



ああ 大別山

(昭和13年10月15日 木田三雄さん撮影)



も第一、第二中隊は准尉が、第三中隊は軍曹が指揮をとっているという状態だった。これ以上の損害を出せない、ぎりぎりの戦力である。しかしこの日も谷軍曹以下五人が戦死し、近藤軍曹以下十一人の負傷を出した。

「明十一日払暁までに大円山、大別富士付近の敵陣地攻撃を準備せよ」との旅団命令により、午後六時五十分、連隊長は作戰命令甲第三八七号を出し①歩兵第九連隊の約半大隊はウ回隊となり、明十一日払暁までに揚家寨東南側付近に進出し、以後犀牛望月地方に進出し、敵の側背を攻撃す」等を命じた。

戦線にまた、将兵のいやがる夜が訪れ、そしてまた朝がきた。十月十一日の朝である。朝方、残っていた雨も午後には上がり、砲兵の試射が開始された。第一線には四たび突撃命令が飛ぶ。山田連隊長は一刻も早く西山付近の敵陣を突破したく、昨夕の作命甲第三八七号によって第一大隊を第三大隊の近くに寄せていた。第一大隊長は第二中隊を右第一線とし、第三大隊の左翼近くまで移動させて攻撃準備を整えていた。

右第一線の第三大隊も、前日から着々攻撃準備をすすめており、右から第九、第十一、第十二中隊を第一線として命令を待っている。この日の攻撃も野砲の試射から始まった。約二<sup>二</sup>き後方、沙窩付近の麻城街道わきに砲列をしいた野砲第二十二連隊の巨砲が山々をゆるがし、西山の敵陣にサク裂、土柱をあげる。「いまの弾着よろし。いいか、その調子で続けざまに撃つんだ」観測の将校が受話器にどなっている。迫撃砲も、敵迫撃砲陣地へりゅう弾、赤弾を集中してぶち込む。重機関銃もおびただしい葉きょうをはじきとばしている。

午後一時二十分、「砲撃中止ッ」上田大隊長が叫んだ。ピタリやむ砲声。合図の日章旗が振られた。

「突撃ッ」

第九中隊は望楼高地めざして攻撃を開始、第十一、第十二中隊の側背にも援護射撃を加える。第十一、第十二中隊は西山めざし、突っ込む。えんがい陣地にこもる敵は、その陣地前四、五十呎付近に機関銃、迫撃砲弾、手投げ弾を集中する。このため果敢に突っ込んで行くわが將兵はバタバタとそのえじきとなり、死傷者の山を築く。わが迫撃砲陣地も敵迫撃砲を粉碎すべく猛射を加えているが、かんじんの弾薬が少ない。しかも不発が多い。りゅう弾五十六発を撃って三十四発まで不発、赤弾も四十四発撃ってサク裂いたのは三十四発、歩兵を有効に援護できない。軍刀を振りかざし、先頭を切って突進した第十二中隊長、村田正昭大尉、また第十一中隊長、野々正巳中尉が左手をやられ負傷、あちこちで負傷者のうめき声がうずを巻く。第一線はその場にクギ付けされ、身動きできない。

部下を励まし突進

——久保准尉が第11中隊指揮——

西山高地の死闘

第十一中隊は傷ついた野々中尉に代わり、久保准尉が指揮をとり「前進、前進ッ」と部下を励ましながら突き進む。敵弾はますます激しい。山本政次軍曹がのけぞる。続いて大西潔軍曹。

第十二中隊方面も、軍刀をかざして頂上に突進した中山安次郎軍曹が機関銃のように激しく落下する迫

撃砲弾を浴び、あつという間に山をころげ落ちる。ついでもた倒れる。こんどは山本治伍長だ。黒田伝一上等兵、藺田六藏上等兵、浅井勘一上等兵、常葉俊二上等兵、桑原徳雄上等兵らも折り重なって倒れる。苦しいうめき声が聞こえる。すぐ後方でこの悲惨な状況をじっと見つめていた上田大隊長は、これ以上突撃を続けることは損害を大きくするばかりと判断、午後一時五十分、攻撃中止を命じた。

攻撃開始からわずか三十分、戦死十二人、負傷三十九人を数えた。(ただしこの数は同日中の連隊の全損害)戦友を失い、多くの将兵が傷ついただけで無念の涙をのんで味方陣地まで後退、戦力のばん回を図った。山田連隊長も無言で岩角にすわり込んでしまった。この日、第一線の状況視察にきた師団参謀、水谷一生少佐に対し、山田連隊長は「いま師団は右連隊に重点をおいているが、同方面は山の奥行が深く、また右側支隊が土門関方面で行っている陽動作戦も効果をあげていないようだ。一方、わが連隊の左翼方面は地形が比較的容易だから、両路口(ふたつぐち)方面に進出するためには師団の重点を左に置いたらどうか」と地形判断を語った。

午後七時十分、第十二中隊から同方面、つまり大砦南方高地の敵情は変化なしとの報告がはいった。「歩兵隊は明十二日、大円山及び西山付近に対する攻撃を続行すべし」との旅団長命令を受けた。連隊長は同十時四十五分「第三大隊は主力をもって、第一大隊は一部をもって明弘暁西山高地を奪取すべし。砲兵第二大隊の援護あるはず」(歩三三作命甲第三八八号)を下した。

○ ○  
そして十月十二日。きょうもまた霧が深い。夜どおし、根気よく盲弾を撃ち続けていた頂上の敵も夜明

け前から静かになった。敵も疲れたのか。穴ぐらにがんばる将兵は「二階のお客さんはおとなしくしている！」と冗談をいいながら、わずかな南京米とイモばかりの飯ごうをかきこむ。砂をかむようなまずさ。きのうまでいっしょにめしを食った戦友の幾人かがけさはもういない。毎日毎日死んで行くのだ。「大別山従軍記」(新聞特派員坪井淳美)には、その情景が次のように描かれている。

「きょうもまた突撃か、これが最後の飯になるかも知れないなあ。せめて一度でいいから内地の飯を食って死にたいよ」

飯ごうをガチャガチャいわせながら、だれかがなさない声でいった。

「思い出させるな、おれは内地という言葉を聞くと胸を刺されるような気持ちをする」

穴ぐらの中から誰かが答えた。兵隊たちはみなしんみりしてしま

った。  
「きょうはおれの番のような気がする。いつまでも死の恐怖に苦しめられているよりも一刻も早く戦死したいよ」

野田上等兵の声だった。



それでも突撃を繰り返して行く我勇士たち

「おれもそんな気がする。きょうまで生き残っていたのが不思議なくらいだ。きょうこそ頂上におどり込んでシナ兵のやつを突き殺してやるんだ」

中山上等兵が興奮してどなるように言った。

「靖国神社へ行けばいつでも会えるじゃないか。りっぱに切り死にするんだ……」

中山上等兵がまた答えた。

午後三時半、砲兵の試射が始まった。さあ、きょうもまた突撃だ。

### 突撃体制崩れ全滅

——瞬にして26人が戦死——

### 西山高地の死闘

十二日午前八時、山田連隊長は西山攻撃を指導するため、予備の第七中隊を率いて磨盤山最高峰に姿を見せた。また第一大隊も本部を同最高峰に置き、とくに第二中隊の指導にあたる。第一線両大隊の将兵は、濃霧を利用して各個躍進し、えん体をつくりながら敵陣に接近、午後三時ごろには突撃距離に進出して待機した。

午後三時四十分、濃霧が一時晴れた。待ち構えていた砲兵、迫撃砲、重機が制圧射撃の火ぶたを切った。ついで突撃命令が下る。第十一、第十二中隊は西山の敵陣へ。第二中隊は一文字山の堅陣めざしかけ上っ

て行く。敵火線は前日を上回るほどの激しさだ。

突撃隊は頂上までとりついたが、手投げ弾を浴び、突撃体制が崩れ、全滅にひんした。中出軍曹が両眼をやられ、大矢勇伍長が迫撃砲に散り、山口隆生伍長、三宅末男一等兵、続いて大橋重雄上等兵、川村一夫一等兵、小林次郎一等兵が頂上にたどりついてやられた。

また水谷誠太上等兵、長田三千夫伍長、大屋光雄伍長、岡本武治、川合清二、南住雄の三上等兵、時田梁男上等兵、野田勝一、中山巳之八、細井俊夫の三一等兵、さらに中井武一郎伍長、上田三造上等兵、松田武門一等兵ともに戦死した。

第十一、第九中隊の決死隊は敵陣の一角を奪取したが、たちまち迫撃砲火、手投げ弾を集中され、後続部隊なくほとんど全滅した。第二中隊方面も突撃開始と同時に中隊長代理の葛原准尉はじめ多数の損害を出し、突入するに至らなかった。この



山田連隊長地下タビで磨盤山最高峰に立った

日も、一瞬にして戦死二十六人、負傷第十一中隊長代理、西山道男少尉（名賀郡青山町下川原出身）以下七十六人を出した。

渡辺第一大隊長は第二中隊をいった激励し、再度突撃を敢行しようとしたが、第三大隊方面の損害が大きいのので連隊長は中止を命じた。午後五時、上田第三大隊長は第十中隊の一小隊を第一線に増加して現在線の確保を命じた。このころ第一線の兵力は第十一中隊がわずか十四人、第十二中隊が二十四人を数えるだけだった。「うめぼし部隊」も、強敵の前に日ごと危機が迫ってきた。同六時十分、山田連隊長は悲痛な声で「各隊は現在地を確保し、夜を徹すべし」と命じた。

夜九時、旅団長から「師団は天象の影響が少ない。左方（注第三十三連隊方面）に重点を移し、主力を李家凹方向から小界嶺方向に向けウ回、攻撃を準備中なり」（歩三〇旅作命甲第四九八号）といってきた。山田連隊長は同十時、磨盤山北ろく一軒家の本部に命令受領者を集め①第十師団は信陽西側に、第三師団はその東側に進出し、岡田支隊は信陽東門を爆破し、城内に進入せり②歩兵第三十八連隊（一大隊欠）を基幹とする部隊を右翼隊とし、十四日払暁までに主力をもって大円山攻撃を準備する③第三十三連隊（伝騎二迫撃砲第五大隊Ⅱ二中欠、山砲兵第二大隊Ⅱ一中欠、配属）は、左翼隊左第一線となり、主力をもって磨盤山南方高地、一部をもって西山を攻撃する。つまり第三大隊（一中欠、速射砲配属）は右第一線で西山を、第二大隊（第五中隊、機関銃一小欠、歩兵砲配属）は中第一線で西山東側高地を、また第一大隊（第五中隊、機関銃一小配属）は左第一線で、主力をもって磨盤山南方高地を、ウ回隊は犀牛望月付近に進出し、右側背を攻撃すべし。攻撃開始は十四日、と命じた。

## 壮烈ノ最後の総攻撃

——第九、十中隊、ついに西山を奪取——

## 西山高地の死闘

十月十三日。午前九時三十分、地下タビ姿の山田連隊長は、野砲兵連隊長とともに磨盤山最高峰に登り、明十四日の攻撃について話し合い、緊密な協定を結んだ。午後五時頃、三浦中佐の第二大隊（五中隊と機関銃一個小隊は揚家寨高地守備のため欠）も連隊本部付近に集結、第一線に第七中隊主力（一小隊は予備）を配し、戦闘準備に入った。第七中隊の攻撃は、西山高地につらなる一文字山陣地である。

一方、前日の突撃で大きな損害を出したまま敵と相対している第十一、十二中隊は、午後七時十分薄暮を利用して第九、第十中隊と第一線を交代し、戦力回復のため後方へ下がった。なお、第九中隊は歩兵第三十八連隊の一部と戦線を交代してからである。この日も川島上等兵以下三人が戦死、内田少尉以下五人が負傷した。

○

○

○

明けて十四日、午前九時三十分、連隊長は磨盤山南側の「岩山」に登り、三浦、上田両大隊長、配属あるいは協力野砲兵、迫撃砲大隊長を呼び、歩砲の協同作戰についてもう一度、緊密な協定を結んだ。同十一時、砲兵は西山、磨盤山南方高地に試射を開始した。いよいよ最後の突撃が敢行されようとしている。きょうの総攻撃は、午後二時まで砲兵の集中射撃のもと突撃をする作戦だった。ところが砲撃が始まるや、



三浦第二大隊長から「第二大隊は予定の午後二時までに攻撃準備を完了することができないため、砲兵の破壊射撃を二時間のばしてほしい」と要請があった。連隊長は直ちにこれを旅団長に報告すると、正午ごろ「師団は攻撃準備を周到にする目的をもって本日の攻撃を中止し、明払曉に変更する」との連絡がきた。そこで午後零時十分、連隊長は「明払曉の突撃にいかんなきを期すると共に身心の休養につとむべし」「作命第三九一号」を下した。将兵は「命が一日延びたぞ」と壕の中で背を伸ばした。やがて、また夜のとぼりが降りた十一時ごろ、突然敵陣地が火を吐いた。夜鳥のざわめく音を、わが夜襲と誤認したらしく、三十分ほどで射撃をやめた。この日も福岡上等兵以下二人が戦死、的場軍曹以下三人が傷ついた。

○ ○ ○

そして十五日、最後の「死の総突撃」が開始された。午前八時三十分、連隊長は指揮機関を率い、磨盤山最



忘れようとして忘れることの出来ない磨盤山の最高峰

高峰に陣取って戦闘を指導、予備の第十二中隊を磨盤山北ろくに待機させた。連隊の右第一線、第三大隊は第十中隊を第一線、第九中隊を第二線攻撃隊、第十一中隊を予備隊とし、また中第一線の第二大隊は第七中隊を第一線攻撃隊、第八中隊を第二線攻撃隊、第六中隊を予備隊とし待機している。

午前十時三十分、砲兵がまず磨盤山南方高地及び西山に対し破壊射撃を開始した。約一時間半にわたる猛撃が終わった。だが西山西北方の突角（突撃点）及び一〇四高地の左端の敵側防機関銃はいぜん健全だ。バリバリ撃ってくる。連隊長は、砲兵の効果は不十分とさらに要請したが「弾薬の関係でこれ以上の破壊射撃はできない」とつっぱねてきた。くちびるを канд 連隊長「よしっ」と決心し「それでは直ちに突撃射撃をやってくれ」と要求した。この間にも迫撃砲は大別富士東北端付近の敵迫撃砲陣地に砲撃を加えている。

午後零時五十分、砲兵隊は突撃支援射撃を開始した。一分に四発ずつ一分間、三分間あいだを置き、一分間四発の割り合いで二分間続けて撃つ。配属山砲、迫撃砲、工兵の超重てき弾筒、重機もいっせいに火を吐く。しかし地形がけわしいため、支援射撃終了と同時に突っ込むことができない。このため第一線は味方の砲弾でやられるのを覚悟して敵前四、五十呎の地点まで迫って待機、そこを突撃発起点とし、射向変換と同時に突撃を敢行、午後一時二十分、ついに第十、第九中隊は西山を奪取した。

## 鮮血をぬぐって指揮

——木田第七中隊長、一文字山血の記録——

### 西山高地の死闘

一文字山陣地の突撃で右目に貫通銃創を負った第七中隊長、木田三雄さん（㍉）Ⅱ松阪市高町、元松阪高校教諭Ⅱの忘れ得ぬ血の記録。第二小隊長で、中隊長代理をつとめていた木田さんは十月一日付けで中隊長（中尉）を命じられていた。



今の木田三雄さん

10月13日 第二大隊は連隊復帰、連隊の中央第一線となり、一文字山を奪取せんとす。連隊長と第二大隊長は協議、第七中隊は第一線、第八中隊第二線、第六中隊は予備隊。

同14日 前方の敵情地形を偵察し、攻撃準備をなす。本日午後二時より攻撃予定なりしも、さらに攻撃準備をなすため明払曉に延ばされ、二時より陣地に至り偵察をなす。夜半、笹原岩一少尉の第一小隊は、突撃拠点占領確保のため、磨盤山の警備を第十中隊と交代、

突撃準備をなす。（木田さんの陣中日記より）

くる日もくる日も第一線で敵とにらみ合いを続けていると、将兵たちは次第にいらだってくる。敵砲弾雨、空腹、寒さ、そして極度の疲労、兵士の中には自分ひとりが窮地に立たされている錯覚に陥るものが出てくる。よい死に場所を見つけて、一刻も早く死にたいと思う。勝ちいくさでさえ、終始第一線にさらされていると、みんなこんな気持ちになってくるものだ。

十五日午前三時、木田中尉の率いる第七中隊は磨盤山ろくのねぐらを引き払い、ひそかに行動を起こした。前日、敵情視察にでた斥候が立ててきた道路標識を頼りにヤミに立ちこめた霧の中へ吸い込まれていく。夜明け前、中隊は突撃拠点にとりついた。敵前まで約百餘は斜面になっており、岩石が露出、樹木のほとんどないハゲ山。高地の稜線には約二層の城砦（石垣）が、名のとおり一文字を引いたように築かれている。多数の銃眼からは銃口が無気味に光っている。横の山にも敵兵の動きがあった。敵陣まで、ほとんどしゃへい物がない。中隊は直ちに壕を掘り、砲弾による損害を防ぐとともに突撃への拠点とした。右第一線には笹浦小隊（二十七人）左第一線には古市次郎曹長の第二小隊（二十八人）が展開した。

午前八時半、後方の師団砲兵が全火力をあげて破壊射撃を開始した。兵士たちの頭上をうなりを立てて通過した巨弾が次々と敵さん壕にくらいついていく。味方の砲撃が行われている間は敵はなりをひそめているが、途絶えるとたちまちチェコ銃を浴びせてくる。集中砲火は、時間を延ばして約一時間半も続いた。だが、敵との距離わずか百餘、射程を誤って落下した砲弾で、突撃支援射撃のため鉄条網に爆薬筒を仕掛けていた工兵一個分隊が吹っ飛ばされた。

正午、破壊砲撃に続き、機関銃が突撃支援射撃の火ぶたを切った。「突っ込めッ」軍刀を抜き放った木田

中隊長の怒号。

「それッ」

兵士たちは壕をとびだした。敵陣めざし斜面をかけ上がる。同時に、ダダダダ：

敵チェコ機銃、水冷式機関銃が狂ったようにほえる。さらに迫撃砲弾、手投げ弾がサク裂する。文字通りの弾雨、「うむっ」とのけぞる戦友を躍り越え、猛牛のように突進する。

敵前五十メートル、この時だった。先頭を切っていた木田中隊長は右目をハンマーでなぐられたような激しいショックを受け、その場にヒザを折った。たちまち鮮血がほとばしり、顔をぬらした。左の目がかすみ、銃声が次第に遠ざかっていく。真っ暗な、底なしの沼に落ち込んでいくような、何ともいえぬ気持ち。（おれは死んでいくのだな。死とはこんな楽なものなのだろうか）と考えた。

思わず（天皇陛下万歳）と二、三回叫んでみた。声にはならなかった。「中隊長殿！」部下の浅沼がかけつけ、包帯で傷口をしばって岩かげに引きずり込んでくれる。これで意識がよみがえった。傷口はしびれ、痛みは感じない。右方から小銃でやられたらしく、右目から鉄カブトのツバをぬいている。肩、腰、足なども五カ所もやられている。

（くそっ！）

鮮血をめぐった木田中隊長は重傷のからだを起こし、敵陣をにらみすえた。指揮を続けるのだ。目の前でまた手投げ弾がサク裂した。

## 軍刀を抜いて突撃

——剣道二段の山岸さん敵兵一人も切れず——

木田三雄中隊長の二層ばかり前にいた第二小隊長、古市次郎曹長がのけぞった。

「中隊長どの、やられました。腹です……」

と叫び「天皇陛下万歳」と言つてまったく静かに死んでいった。(あとで詳述) 続いて上野正夫伍長(北牟婁郡出身)も左またをやられた。動脈を切られたらしく、出血がひどい。彼は「中隊長どの、水が飲みたい。ミズ、ミズ……死んでもよいから飲まして下さい」「しっかりせよ」と抱き起こす大西恒雄軍曹(松阪市射和出身)に「目が見えなくなってきました。ああ、もうダメです」そういつて彼の腕の中で絶命した。

(上野、おまえはりっぱな最期をとげたぞ)

木田中隊長は胸の中で呼びかけた。伝令はついても来なくてもよいといつて突撃したのだったが、いつのまにか彼は中隊長のそばについてきていたのだった。残念でしかたがない。

もう一度砲兵が射撃するから突撃せよ、との伝令だったが、いま砲撃されたらあたりに折り重なる部下がまったく味方砲弾でやられてしまう。木田中隊長は、ただちに大隊本部へ伝令を送つて状況を報告、負傷者の収容を頼んだ。そして部下に後退を命じた。砲弾がサク裂した跡のくぼ地や岩かげにへばりついていた兵士たちはものざん壕(突撃拠点)へころがり込んだ。

夜に入って負傷者の収容が行われた。木田中隊長は山中の世話でタンカに乗せられて山をおり、仮包帯

所に運ばれた。連隊の出征以来、第二小隊長、あるいは中隊長代理として多くの戦闘に参加してきた木田中尉は、一文字山攻撃の命を受けたときも、なんとかなるだろうとやられる想像などしたこともなかった。それよりも、負傷して手足を失うようなことになるぐらいなら死んだ方がよい、と考えることはあった。だが、いざ野戦病院に収容されてみると、(右目がつぶれても生きられるものなら生きてみたい)と思うようになった。そして東京の日赤病院で二十数回の手術を受けたのであった。

「勝ちいくさだったから助かったのでしょう。大東亜戦争末期にあんな負傷をしていたらとても助かっていません」と、戦争の悲惨さを回想している。木田さんは十九年八月再び応召(将校は終身、兵役が免除されなかった)京都で軍事教官をつとめているうち終戦となった。大尉。

○

○

○

戦死傷が相次ぎ、指揮をとるものがいなくなった。第三機関銃中隊弾薬小隊長だった山岸実三さん(七三)『津市八丁』は、機関銃小隊も合わせ指揮せよ、との命令を受けて二個分隊二十五、六人と自分の分隊十六人ばかりを率いて出撃した。

軍刀をぬき放ち、伍長の伝令(名前不詳)を連れ、真っ先に突撃した。起伏地をかけ、散兵壕を一足跳びに乗り越えようとしたとたん、敵兵はいないと思っていた壕から若い中国兵が二人、ニョッキリ姿を現わし、瞬間ニョリと笑ってすかさず壕にもぐった。「伏せ」伝令の絶叫に、思わず大地に突っ込むように伏せた。敵が放り出した手投げ弾がサク裂した。伝令伍長は伏せた姿勢で腰の手投げ弾を素早くもぎとると、カチンとクツの底でショックをくれ、壕の中へ投げ込んだ。ダッダーンノ壕内にひそんだ

敵の一人は土砂とともに吹っ飛び、もう一人はあわてて壕をはい上がり、脱兎のように逃げて行った。やっと身を起こした山岸小隊長の額にはベツトリあぶら汗がにじんでいた。

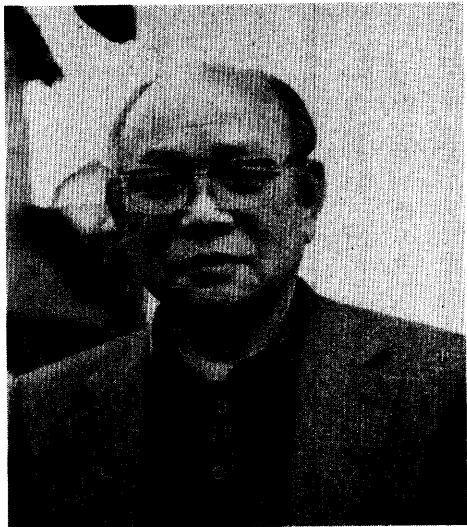
山岸さんは「わたしは敵を切り殺す決意で軍刀を抜いて突撃したはずですが、切れませんでした」とニガ笑いする。山岸さんは剣道二段の腕前、昭和十四年十一月の国体（東京）に軍隊代表で出て二回戦まで進出したほどだ。だから剣にかけては自信があった。また弾薬小隊は後方に待機してよい場合に、山岸小隊長は最前線までとび出し、堤千里機関銃小隊長（久居市に在住）に注意されるほどの度胸の持ち主である。それでも一人の敵兵も切れなかったのである。「精神の問題でしょうね」と山岸さんは回想している。

「許せ、これが戦争だ」

——片山伍長、戦友見捨て軽機探し——

## 西山高地の死闘

一文字山陣地に突撃をかけた第七中隊（木田三雄中尉）は敵手投げ弾の壁、それに射程を誤った味方砲



今の山岸実三さん



弾でおびただしい戦死傷者を出し、攻撃拠点まで後退せざるを得なかった。だが、敵陣までとりついた兵士があった。

左第一線で突っ込んだ第二小隊軽機分隊長（第五分隊）片山重雄伍長と芝理一等兵の二人である。

片山さん（七〇）は三重郡川越町福崎一五五に健在、三重県洋ラン会会長をつとめるなどして花づくりにいそしんでいる。

軽機分隊（一丁）は突撃する味方を後方から援護し、陣地占領と同時に前進して敗敵を掃射するのが任務だ。ところが、西山高地の戦闘では味方火器が乏しいため、せっかく奪取した陣地をその都度逆襲され、取り返されるありさま。

そこで、この日は小銃とともに突撃し、占

領後の敵反撃に備えよとの命令だった。事変始まって以来の変わった作戦である。さて突撃は開始された。片山伍長指揮のもと、軽機分隊員六人（兵力消耗のため最小限度の六人で編成）は小銃の二倍も重い軽銃



危い、煙幕を張って敵のトーチカ爆破に突っ込む我兵士

と弾薬をかついで突っ込んだ。高地上の城砦の敵はチェコ機銃を掃射し、手投げ弾の雨を降らせてきた。サク裂する手投げ弾は、まるで「火の壁」だ。味方は折り重なってのけぞる。片山伍長はしゃにむに突っ込む。

ついに城砦（高さ二層ほどの土壁）にとりついた。死角に入ったらしく、敵弾は後方の土にかみついてくる。だがいっこうに後続の気配がない。後方、高地の中腹あたり、砲煙の中でやられた味方がうごめいている。（おれの部下も他分隊もみんなやられたのだ。敵陣までとりついたのは自分ひとりらしい）

見れば眼前の敵は城砦からからだを乗りだしてなおも手投げ弾を投げおろしてくる。片山伍長の手にはモーゼル軍用拳銃と木田中隊長から借りた軍刀がある。だが、銃拳術なら自信があるが、拳銃などは操作したことがない。弾倉を調べると、それでも突撃中に二、三発発射していた。（たった一人、しかも拳銃一丁じゃとても齒が立たぬ。イヌ死にする時ではない）そうハラを決めると、ころげるように百発ばかり斜面をかけおり、味方ざん壕に飛び込んだ。これを目がけ、チェコ機銃がほえたが幸いやすり傷ひとつ負わなかった。「片山分隊は、自分以外は全滅しました」と報告。

やがて夕やみが立ちのぼりはじめると敵銃声も途絶えがちになった。ひと息ついた片山伍長は部下が戦場に残してきた軽機関銃を取りかえしに行く決心をした。当時、支那軍が戦死したわが兵から奪った兵器や日の丸を自国の新聞に大きく掲載し、国民の士気をあおっていた。

夜になれば、敵は必ず戦場に現われ、遺棄兵器を奪って行くに違いない。もしわが分隊の軽機が敵の手に渡れば第三十三連隊のハジだ。そう思うと居たたまれず、ザン壕からはい出した。日は落ちたが、まだ

明るい。片山伍長は単身イモ虫のようにはい出す。もそつと動くと、たちまちダダダ……と撃ってくる。敵は一段高い望楼に監視兵を配備しており、その指示で銃眼が火を吐く。突撃中は夢中だが、いまはおそろしかった。だが分隊長としての責任がある。片山伍長は戦死者のように手足を広げ、しばらく動きをとめる。そして上目づかいに敵陣を見やってじりつと一歩進む。あたりはおびただしい戦死者の群。死体をそつとかき分け、こんどはあお向けになって、目だけを敵にやりながら一歩また一歩地を押す。わずか数十歩進むのにどれぐらいかかったろうか。

戦死者ばかりと思っていた屍（しかばね）の山の一角で「ううッ」とうめき声を耳にした。

「……………」

そつと頭をめぐらすと他分隊の浜口勉上等兵（志摩郡）と記憶している。手足をやられ、血みどろになっている。「助けてくれ」とうめく。片山伍長は迷った。彼を背負って動けばたちまちハチの巣だ。この傷ではどの道助かりそうもない。軽機をとりかえす任務も重い。

（どうするか）

片山伍長は苦しんだ。あぶら汗がにじむ。（浜口許してくれ）心で詫びて再び動きだした。

「見殺しにするのかッ」

浜口上等兵の絶叫がおおいかぶさってきた。

（浜口、うらまないでくれ、これが戦争なのだ。たった一丁の軽機だが敵に奪われてはならないのだ）  
片山伍長は、くちびるをかみしめ、浜口上等兵の声をふり切った。

探し求めた軽機関銃はついに見つかった。斜面の中腹、味方砲弾のサク裂跡、直径約一・五呎の穴の中にあつた。軽機がめちやめちやにこわれ、射手の結城進一等兵（名賀郡出身）は軽機を握ったまま、すぐわきには第一弾薬手辻一等兵が、それぞれ戦死していた。敵手投げ弾でやられたらしい。（ふたりともりっぱな最期だ。おれもそのうちやられるだろう。あの世で会ってほめてやろう）しばし黙祷した片山重雄伍長は、軽機をかかえりと脱兎の勢いで、再び味方さん壕にかけ込む。ダダダダ……

敵チェコ機銃が足元の土に食らいついた。

あまりにも激しい勢いでころがり込んできたので味方は（敵襲ッ）と勘違いしてざわめいたほどだった。

「分隊長どの！」と呼ばれて振り向くと芝理（さとる）一等兵が血まみれになって身を横たえていた。

「芝、芝ではないか。やられたものと思い込んでいたが、よかった、よかった」

彼は腕をやられていたが、元氣だ。

「分隊長殿、自分も城砦にとりついたのですが、後続はなし、負傷はしてしまふでやむなく後退しました」

「そうだったのか。おれはやられたとばかり思っていたぞ、よかった」

突撃は両翼約五十呎の線に展開して敢行されたが、何しろ修羅場のこと、片山伍長は芝一等兵に気づかなかったのである。

このころあたりは暗くなっていた。分隊長である片山伍長の次の任務は戦死した部下の収容だった。動けば敵弾がとんでくるだけに、命がけの仕事だ。第一小隊の田中操准尉が、

「あぶないからもう少しあとにせよ」

と注意した。

「しかし、部下の遺体を一刻も早く収容したいのです。」

片山伍長は綱を手にして再び敵前にはい出した。かなり暗いが、それでもこちらの動きを察知してチェコ機銃を射ってくる。そと部下の死体を探して綱で縛る。そして味方さん壕まで下がっては綱を引っぱって死体を引きずりおろす。これをくり返すのだから並みだいていの仕事ではない。

こうして傷だらけとなった第七中隊は次の突撃を第九中隊（太田雄三中尉）に譲ったのであった。

片山さんは「戦場に遺棄した軽機奪還に命をかけたものですが、当時の教育を受けたわたしは命より軽機の方が大切だと思っていました。いまでこそ命の方が大事ですが…。わたしは連隊の全戦闘に参加したが、一文字山突撃ほど悲惨な戦いはありませんでした」と回想している。

大東亜戦争で再び召集され、安部隊でビルマ・インパール作戦に参加したが、マラリアにかかって後送されたため九死に一生を得た片山さんである。



当時の片山伍長

○ ○ ○  
戦闘詳報によると第七中隊は第三大隊と同時に突撃したが、木田中尉以下多数の損害を出し（第三大隊は後述）やがて日没となり、連隊長は涙をのんでこの日も「突撃再興を中止」の命を下したのであった。そして十六日午前二時「連隊は本十六日さらに態勢を整えたるのち西山付近の敵陣地奪取を再興す」（歩三三作命甲第三九二号）を下した。十五日の戦闘で連隊の損害は、戦死宮村准尉（一志郡嬉野町）以下二十九人、負傷太田雄三中尉以下六十五人の多きを数え、戦力はいよいよ落ちた。

### 「おれもあす突撃」

——古市曹長、中西曹長に別れの言葉——

### 西山高地の死闘

十月十五日、一文字山陣地への突撃で壮烈な戦死を遂げた第七中隊、古市次郎曹長（松阪市魚町出身）  
『既述』と同期生だった津市上浜町四丁目、中西勇さん（七三）の戦友回想記。当時中西さんは連隊本部付き曹長だった。

大別山の敵はガン強だった。強固な陣地を築き、すっかり戦闘態勢を整えて待っていただけに、これに対して第三十三連隊は苦戦を続けた。陣地の一角を奪取してはすぐ奪い返され、わが突撃隊はすでに五、六回も敵前十、二十坪まで迫っては、そのたびに手投げ弾のカベにさえぎられ、累々としかばねの山を築くばかりだった。連隊本部にも苦悩とあせりのいろが濃かった。



当時の古市曹長と今の中西勇さん（右）

そして山田連隊長は第七中隊（木田三雄中尉）に十五日払曉攻撃を命じたのである。その前日、つまり十四日夕方、古市曹長がひょっこり連隊本部にやってきた。「中西、長い間のつき合いだっとなあ、いろいろ世話にもなった。ありがとう。おれも、いよいよあした突撃することになった。貴様も元気でやってくれ」

いつもと変わらぬもの静かな表情だが目が光っており、決心のほどが読みとれた。別れのあいさつにきたのだ。（古市のやつ、死ぬ覚悟だな）そう察すると「そう、気をつけて行けよ、決してムダ死にするな」としか言えなかった。胸がつまりそうだった。二人はじっと手を握り合い、そして古市曹長は夜霧の中へ帰って行った。中西曹長には、彼がヤミの中へ吸い込まれて行くのではないかとさえた。思えた。

中西、古市両曹長は豊橋陸軍教導学校（下級幹部養成）の第六期生だった。この年にでた第三十三連隊出身者は十五人だったが、古市曹長はからだもガン健でないうえ、気も弱く、やさしい男、成績も決して上ではなかった。そんな彼が小隊長で突

撃することになったのである。あとで聞いたことだが、突撃命令を受けた日、彼は持ち物を整理してズノウ一個にまとめ、「おれが死んだら、これだけ内地へ送ってくれ」といい残し、あとはその場で処分したのだった。

夜が明けた。第七中隊は、砲兵の破壊射撃のもと、突撃を開始した。古市曹長指揮の第二小隊は左第一線で突っ込んで行く。連隊本部の山から敵陣までの直線距離は約三百呎、中西曹長は眼鏡で敵情を探りながら、やはり古市曹長のことが気になって彼の姿を探し求めた。だが、修羅の戦場に彼の姿を見出すことは困難だった。

このころ敵前わずか三、四十呎まで突っ込んだ古市曹長は腹部をやられ、静かに「天皇陛下万歳」を唱えて戦死していったのであった。(木田中隊長の話、既述)

中西曹長は倒れている古市曹長をやっと眼鏡にとらえた。

(やっぱり彼はやられた。いい男だったが兵隊には向かぬ)

中西曹長はめい福を祈った。第一線では、古市曹長がやられていることが分かりながら、昼間はとても収容できなかった。中西曹長は何度も何度も眼鏡で彼の姿をとらえた。おびただしい敵弾がサク裂する中で、彼の倒れている所だけが、思いなしに静まりかえっていた。

中西さんは「ふだんはどちらかといえは弱々しい彼が、いざ突撃となるときっぱり覚悟を決め、壮烈な突撃をして行った。四十数年経った今日でも彼の最後だけは忘れられません」

と、しみり語っている。



中西さんは昭和七年入隊（志願兵）満州駐在を経て、支那事変は第二大隊本部甲書記で出征、姚馬渡の戦闘後から連隊本部付きとなった。以後引き続き第三十三連隊で南方へ、十八年九月第五百一十一連隊へ。さらに十九年四月関東軍野戦兵器廠新京廠に転属（准尉）同地で終戦、シベリアで抑留生活を送り、二十年十一月復員した。

### 中止命令伝わらず

——太田中尉、独断で突撃決意——

### 西山高地の死闘

津市船頭町三三八一、P—一〇三一の太田雄三さん（八九）が第九中隊長だった。

十月十四日、第九中隊は西山高地（一〇三高地）攻撃を命じられた。太田中尉は、いよいよこんどは命がない、と覚悟を決め、部下に「故郷へ手紙を書け」と命じ、身の回りの始末をさせた。野戦経験の乏しい補充兵は、足手まといになるばかりだから、残して行くことにした。「ご苦労だなあ」と肩をたたかれ、顔を上げると古見旅団副官だった。「恐らく無事には帰れないだろう」とことば少なに答えた。

明けて十五日、太田中隊は第二線攻撃隊として西山に攻撃前進を開始した。率いる部下は二個小隊と機関銃一個小隊、総兵力はわずか六十人たらずである。砲兵の支援射撃のもと突撃を敢行した。敵との距離は百餘。敵と太田中隊の間には第一線攻撃隊の第十中隊（間柄馨中尉、松阪市山室）がすでに戦闘状態にはいつている。敵は迫撃砲、重機、手投げ弾で十字砲火を浴びせてくる。手投げ弾はまるで石でも捨てる

ように惜し気もなくバラバラ投げつけてくる。

第一小隊長、土井俊一少尉がやられ、後方へ下げる。兵もバタバタ折り重なる。太田中尉は壕の中へ腰をおろすと（ええい、どうにでもなれ）とたばこに火をつけた。これが大隊本部の眼鏡にとらえられた。「太田は、ひどいやつだ」と上田大隊長が嘆息したそうだ。そのうち第三小隊長、駒谷一郎准尉（松阪市大石）が「こんちくしょうッ」とからだを起こした。「待てっ、駒谷」とどなったが、制止を振り切って突進、たちまち手投げ弾の破片を腹に受けのけぞった。残る将校は太田中尉ひとり。第一線攻撃隊の第十中隊も大きな損害を出している。太田中尉は、独断で突撃を決意、兵をまとめ第十中隊を合わせ指揮し突っ込んだ。

このとき、大隊本部から「突撃中止」の命令を持った伝令、川島軍曹（阿山郡島ヶ原村出身）が山をかけあがってきた。だが、彼は激しい戦線の状況を見ると、突撃中止命令を伝えず、そのまま自分も銃をとり戦闘に参加、



攻撃前進する斜面の下から写した貴重な戦場光景

負傷してしまった。このため突撃中止命令は、ついに太田中尉のもとに届かなかったのだ。突撃が中止になったとはツユ知らぬ太田中尉は（もうこれまでだ。イチかバチかやってみよう）とハラを決め「突撃っ」と軍刀を振りかざし、壕からおどり出た。待ち構えていた敵が見のがすはずはなかった。手投げ弾を束にして投げつけてきた。先頭を切る太田中尉は破片を浴び顔面を真っ赤に染めてひざを折った。かけつけた看護兵に「頭か？」と聞くと「顔です」と答え、大隊本部までタンカで運ばれた。安田軍医は「大丈夫だが、視力は落ちるかも知れんぞ」と心配してくれた。

突入部隊は陣地を奪取し確保するとともに、すかさず陣内戦闘に移った。しかし敵は反対側の第二戦陣地から手投げ弾をばらまき、側防火器も一斉に銃口を集め、猛射してきた。鈴木軍曹（後述）以下必死に防戦、これを見た大隊長は予備隊を第一線に送ったが、途中で敵銃火にクギづけされ、突入隊はまったく孤立、ほとんど全滅、突撃はこの日も不成功に終わった。この日連隊長は、前日までの経験から突撃隊を二線に分けたのであったが（既述）第十中隊が大きな損害を出したので、やや時期は早過ぎたが、第二線の太田中隊長は独断突っ込んだのである。戦闘詳報にも「状況やむ得ざるところなり」と記録されている。

### 勇敢「七人のサムライ」

——単独、敵陣で大あばれ——

### 西山高地の死闘

十月十五日右第一線で展開された第九、第十両中隊の突撃はまったく「死の突撃」だった。すでに太田

第九中隊長以下將校、兵の多くがやられ、西山高地は屍山河と化した。

突然、砲煙彈雨をつき、勇敢にも敵陣におどり込んだ兵士があつた。第九中隊の鈴木勉軍曹（鳥羽市安楽島）だ。続いて二人、三人と敵壕（ごう）に突っ込んで行く。第十中隊長の間柄馨中尉（松阪市山室）土井俊一少尉（京都府綾部市）荒木光治伍長、下村健三上等兵、豊田末男上等兵、堀三郎上等兵の「七人のサムライ」だ。鈴木さんの記憶によると、土井少尉が第一小隊長、鈴木軍曹は第一分隊長だ。友軍の援護射撃と同時に突撃が始まつた。正面の敵は応射を中止しているが側面から敵砲弾がくる。中隊は混乱した。友軍の援護がやむと敵は手投げ弾の雨を降らせてきた。兵士たちは身を避け、あるいは落下した敵手投げ弾を無意識に拾って投げ返す。鈴木軍曹は右側の岩かげに走り、よじのぼって敵陣におどり込んだ。無我夢中、敵を銃剣で突き、なぐり倒す。自分では一体どうなっているのかわからない。ふとわれにかえると、いつの間にか壕の左端に移動していた。後続の友軍の姿はない。



豪雨の中でもただ前進（観音山付近）